
ここから始まった

魔法戦隊三輪野助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここから始まった

【Nコード】

N0911B

【作者名】

魔法戦隊三輪野助

【あらすじ】

もしも、あのお方の正体が、蘭だとしたら・・・コナンは・・・

序幕

いままでの 推理から、

ありえないほど恐ろしい事実が、あつた

ものすごく悲しい。

信じたくなかった！

でも、それが、真実

黒の組織のあのお方の正体が、

蘭だとは、信じたくない。

でも、全てを終わらせなければならない。

コナンは、一旦 本当の自分の家（工藤家）に

行った。

家の中に入ると、

そこには、拳銃を持って、

新一^{コナン}を待ち伏せしていた

蘭が、いた

「久しぶりね…！
新一」

銃口を向けて、微笑む蘭

コナンは迷った．．

序幕（後書き）

三輪野助：「蘭が、あの方という設定に一度して見たかったんです
コナンには、怒られますが．
組織話では、これかについて．

評価お願いしますm（　　）m」

1 白から黒に染まってしまった

白から、黒には簡単に染まる。

ありえない・・・

あの優しい蘭が、

黒を生み出した張本人だなんて・・・

オレは、ショックのあまり硬直してしまいそう・・・

「新一どうしたの？」

私は、やっと会えて嬉しいよ・・・！

あんたは、ずっと私を置いてきぼりにしたもの・・・
寂しかったわ・・・」

拳銃を離さずに、

さびしげな表情で語る

それと引つかかったのは、

このコナンの姿で、
蘭に新一だとバレたことである。

それに、

オレの正体が新一だとわかっていたんなら

今まで　なぜ組織の薬について知っているオレを殺さなかっただろ
う．．

コナンは、蘭を恐ろしく感じる

一歩も動けない．．
声もでない．．

それでも、オレは、声を無理に出す。

「蘭は．．．組織は、一体何が目的なんだ！」

蘭は、クスって笑う

「目的？そうね．．

死者を簡単に蘇らせる秘薬の完成かしら
生き返らせなければならぬ人がいるの

だから、何回死んでも蘇らせるそんな秘薬がほしいのよ…！」

「でも、蘭．．．灰原は、お前の事

組織に殺された姉さんに似ているって言うている・・・

蘭を自分の姉そのもののように思っている・・・

・ そんな蘭が、あの方の正体だと知ったら灰原は、ショックだろう・・・

だから、頼む！

これ以上 組織としての行動は止めてくれ・・・」

「哀ちゃん・・・いや、シェリーは

私達を裏切った・・・
裏切ったのよ・・・」

バン・・・！！

いつもと違う蘭が、
コナンの方に発砲した。

コナンは、なんとかよける

発砲した時に当たった家具が

派手な音を、響かせて

一瞬で、粉々に粉碎される

ばらばらに落ちている

コナンは、そのすごい音にスゴく反応する

また何回も発砲する．．

蘭には、攻撃できない

しつこく逃げる

蘭は高笑いする

「新一！逃げてばかりじゃあ

組織を破滅なんてできないわよ……」

と言っても 相手が蘭だと思つと

倒すなんてできない

一番大切な蘭を

倒すなんて．．

かといって、このまま蘭を野放しにするわけにもいかない！

オレは、どうすりゃいいんだ．．

どうして、蘭があの方なんだ？

この時は、自分の推理が、

間違っていたほうが、

いいと思った！

でも、事實は、蘭〃あの方

今まで、何人もの人を殺してきた組織のボスだ

その組織のボスは蘭だった．．

コナンは、歯を食いしばり、

キック力増強シューズを調節している

そして、目の前にあるサッカーボールで、

蘭にめがけて蹴った．．

この時のコナンはともつらそうだった．．

蘭を傷つけてしまう

でも、ボールは、吹っ飛んだ。

蘭に当たってしまふ．．

と思ったが、蘭は

みごとにボールをよけて、

その後、素手でボールを粉碎した。

「忘れたの？

私が、空手の都大会で優勝したぐらい

強いことを．．」

蘭は、暗すぎるこの部屋で再び笑った

まだ夜じゃないが

この部屋は、とても暗い

コナンは、悔やんでいる

蘭は一体どうすりゃ

もとどおり、白に戻るのだろうか・

今の蘭は黒に染まっている

そんな蘭を白に戻す

なにか方法はないのだろうか？

なあ、 蘭・・・もとに戻ってくれよ・

1 白から黒に染まってしまった（後書き）

コナン「ふざけるじゃねえ（怒）

なんで蘭があの方なんだよ…（怒）」

三輪野助「（やっぱり怒ってきたか・・・）ゴメン コナン私が悪いです」

コナン「それにおめー他の連載中の話を早く完結しろ！」

三輪野助「（えええ・・・）

評価お願いしますm（――）m」

2 シルバーブレットとエンジェル

蘭は拳銃を離さない．．

ただひたすら、コナンをめがけて、

撃ってくる。

「悲しいわね…」

私が、恐れていたシルバーブレットが、
あなただなんて．．．」

（シルバーブレット？銀の弾丸か．．）

蘭の動きが、止まる

「シルバーブレットこそ、組織を破滅へと導かせる厄介な者．．
前にベルモットが、会ったことが、あるっていつていたわ．．

それが、新一だったのね…」

コナンには、よく分からなかった。

「私の部下達も、シルバーブレットになったあんたに倒された．．

その实力を見せてみなさいよ…！

無敵のシルバートレットの实力を・・・」

今までコナンは、

ジン・ウォッカ・キャンティ・コルン

そして、ベルモットを倒してきた・・・

キールは、病院から、抜けだし現在 行方不明・・・

その決戦で、組織のメンバーが、こうつぶやいた。

「シルバートレット、

あの方に、手を出すな…

あの方は、我々と違って、

罪人なんかじゃない・・・

立派なエンジェルだ・・・」

その時も、シルバートレットと呼ばれていた。

シルバースレットについては、一体何のことかわからない。

多分だが、言える事は、

蘭は、完全な悪では、ない．．

組織のメンバーにも信頼されている．．．

オレ達にも、本当に優しすぎる

そんな蘭が、

本気で人を殺したいと考えているわけがない．．

きっと何かあったんだろう．．

オレは、さっき蘭を疑ってしまった。

人殺しの組織のボスだと．．

我を忘れて、ボールを蘭に向かって、

蹴ってしまった。

オレは、悔しくて、

家から飛び出した

．．．

蘭は、血相を変えて、

オレを追いかける！

オレは必死になって、

蘭から逃げる。

今のところ見つかっていない・・・
でも、このままで本当にいいのだろうか？

逃げてばかりじゃあ
蘭を白に戻すことは、

できない・・・

オレらしくない・・・

『運命から逃げるんじゃないぞ』

そう灰原に言ったのは、

オレなのに、なぜか

襲いかかってくる蘭から、

隠れている・・・

情けないなあ・・・オレは・・・

偶然にも、辺りが暗くなっていたので

コナンを殺そうと血相をかえた蘭の姿は、
誰の目にもうつっていない・・・

オレは、蘭に立ち向かうと決心した。

どんなことがあっても・・・

運命から逃げない・・・

そのまま蘭が、行った方向に向かった・・・

そこは、河原だった・・・

コナンは、河原まで、追いかけて

蘭の目の前に降りたった。

「やっぱり来たのね！

新一らしいわ・・・

それでこそ真のシルバープレート！

私が、恐れている唯一の敵・・・

でもね、私には、シルバートレット以上の力があるのよ…！

果たして新一が、私に勝てるのかしら！？」

辺り一面に広がっている雑草が、風で揺れ動く。

この決戦の幕開けを告げているかのように・・・

コナンは、麻醉銃を

蘭のほうへ向ける。

蘭は、何気なく拳銃を持って

その銃口をコナンの目の前で、

向ける・・・

両者しばらく沈黙状態である

それから、同時に

コナンは、

麻醉銃で蘭をめがけてうつて、

蘭は、拳銃の乾いた音を響かせた。

蘭、絶対にお前は黒から、

白に戻してやる・・・

そう心の中で祈念して、

あの方〓蘭との最終決戦が始まった・・・

2 シルバーレットとエンジェル（後書き）

コナン「オイ、今度は、蘭と戦うのかよ…（怒）」

三輪野助「そうですよ。それにしても評価が増えました 三後もう
少しで、ランキング50位になります。」

コナン「ハアァゝ こんな下手な作品があ？

蘭をあの方にしたくせに・・・」

三輪野助「コナン、うるさい！」

評価お願いしますm（）（）m

3 初：シルバーブレットと罪人になったエンジェルの決戦へ前編

2人は、激突した！

麻醉銃の針が、蘭の左腕に当たった。

しかし、蘭に、麻醉銃は、効かなかった・・・

蘭は、コナンをめがけて撃った。

すると、コナンの肩に弾丸が当たった。

少しだけ血が出た・・・

蘭も麻醉銃の針を取りだすために、

自分の左腕をもう片方の右腕で撃った・・・

少しだけ血が出た。

地べたが、ちよつと赤みがかかった。

コナンの周りの雑草も緑と赤が、混ざったみたいだ・・・

お互いに傷を負った。

蘭は、とてもつらそうだった。

オレと同じぐらいの痛みを、味わっているから・・・

傷つくのは、オレだけで十分だ。

蘭が、傷つく必要はない・・・

まるで、羽を失ったエンジェルのようにだった・・・

蘭は、左腕の痛みに耐えながら、

再び拳銃でコナンの方向へ

撃つ・・・！

オレは、肩を押さえながら、
逃げる・・・

「ま、まて蘭 これだけは、聞いてくれ・・・
オレを殺してもいいが、絶対に灰原だけは、殺すな・・・！」

そうは、言ったものの、

あの方として目の前にいる蘭では

オレの言うことを聞かないだろう・・・

「分かったわ．．シエリーには、
絶対に手を出さないわ．．」

蘭は、震えながら、涙目に

なっている

どういうことだ．．

組織は、裏切った灰原を

殺そうとしているんだろ？

今までジンとかにも

灰原を殺すように命令していたんだろ？

その張本人が、なぜ今にも泣きそうな
表情してんだよ．．

わからねえよ．．

どうしてなんだ？

余計に、お前の考えが、

わからねえよ．．

教えてくれよ．．蘭

それに、拳銃を離さない．．．

オレを殺すつもりなんだろうか．．．

拳銃で人を殺すなんて、蘭に相応しくない．．．

蘭には、罪人の顔と
エンジェルの顔があつて

どっちを本当に信じればいいんだろう．．．

強い風が、河原の周りに吹く。

そう、さつきよりも強い．．．

でも、オレは強い風さえ気にも、

ならなかった．．．

ただ、蘭の気持ちを知りたかった．．．

どっちが、蘭の本音なんだ？

蘭は、しっかりと持っている拳銃を離しそうになる。

本当に泣きそうだった

それでも、さすがに泣かなかった

いつもの蘭なら、

こんな状況に陥ったら、

絶対に泣いていた。

でも、今オレの目の前にいる蘭は、

日本最大組織を作り上げた・・・

その組織のあの方って言われる人物だ・・・

泣きたくても、部下達をここまで最強にしたあの方だという

プライドがある・・・

だから、涙が出てくるのをこらえた。

オレは、立ち止まっている蘭を悲しそうな表情で見ている

「つつっ・・・痛いわね・・・」

「ちょっとだけ痛かったわ・・・」

蘭は、そう言ってまた復活した。

「アアアアアア・・・」

空手の構えだ．．

次は、素手でやるのか．．

すぐに、蹴りが入る。

素手では、蘭に勝てない。

蹴りをよけるため、瞬時に

逃げきらなければならない！

「アハハハ．．．

どう？ 新一．．

私には、空手だってあるのよ．．」

オレは、よけることが、できても、

集中的に狙われているため、

攻めることができない。

当然、蘭を傷つけるのは、嫌だ．．

でも、せめて動きを止めたい．．

コナンは、

蘭が気をためている瞬間に
ボール射出ベルトから、

ボールを出した。

そして、蘭の死角になるところから、

ボールを思いっきり蹴った・・・

すると、そのボールは、
蘭の髪を通った。

あとほんの少しで、
蘭に当たっているところだ・・・

ボールとすれ違いになり、蘭は、少し驚いていた。

力がちよつとぬけた。（さすがね… 新一・・・
いや、シルバールブレット・・・
サッカーの実力は相変わらず落ちてないみたいね・・・

でも、新一は、まだまだこんな程度じゃない！
見せてもらっわよ！
シルバールブレットの本当の実力を・・・）

傷ついた蘭は、笑っていた・・・

3 初：シルバーブレットと罪人になったエンジェルの決戦へ前編（後書き）

三輪野助「やった（・・ハ・）ノやっとなランキング50位になった

♪（*ハ・ハ）ノ

みなさん、ありがとうございます！」

コナン「ええ」

ありえねーZZZZZ・・・こんなふざけた話があ（？―？）

でも、50位だろ？

すぐに落ちるな・・・こんな話・・・」

三輪野助「コナン、うるさい！

一言多いんだよ」

「

評価お願いしますm（―）（―）m

4 初：シルバーブレットと罪人になったエンジェルの決戦へ後編

河原にまた風が吹く

しかも、冷たい風が2人を包む。

蘭は、再び拳銃を両方の手で持つ。

コナンは、キック力増強シューズを

強く調節する。

蘭は震えている！

ヒリヒリとする蘭の左腕・・・

汗がにじむ・・・

支えているのもつらい

コナンは、またボール射出ベルトから、
サッカーボールを出した。

出した瞬間に、さっきよりも強い力で

蹴った。

あとほんの少しで、

蘭にボールが当たる！

そんなギリギリのところで、
蘭は、拳銃でボールを撃った。

見事にボールが当たるギリギリで、

かわした．．

いや… 本当は、わざと当たる直前で

拳銃を撃つようにした。

蘭は完全によけると思っていたので油断した。

でも、油断は禁物．．

サッカーボールが、
撃たれて砕け散った時に、

蘭には、コナンが見えなかった。

なぜならば、砕け散ったサッカーボールが、

目の前で地べたに

落ちていくその光景が、

どうしても焼き付いてしまっから．．

光景にとらわれている時がチャンス．．

コナンのねらいは、

ボールを蘭に当てることでは、ない．．

蘭が、どうしても油断してしまう瞬間を待っていたのだ．．

そして、どさくさに紛れ込んで

伸ばした伸縮サスペンダーで、

蘭の負傷している腕を捕らえた。

「蘭、やっと 捕まえたぜ…」

コナンは、勝ち誇ったかのようにだ．．

「よ、よくも．．

負傷している腕をこんなサスペンダーで巻きつけて．．」

「これは、博士に作ってもらった伸縮サスペンダーっていうんだ！」

蘭は、ぶちきれた．．

「それが、何だっというのよ！
黙っていりゃあ調子にのったりして、

これぐらいで、やられるほど、
私は、ヤワじゃないのよ．．」

素早くからまった伸縮サスペンダーを取り外した。

蘭は、伸縮サスペンダーを投げ飛ばした。

伸縮サスペンダーは、下に落ちている。

「まだまだ、私には、勝てないわね．．新一．．

無敵の私に勝つなんて、
ま、不可能だけど．．．」

「無敵ってどういうことだ！」

蘭は、クスツと笑った。

「シェリーが一番すべてを知っているわ…」

それだけしか言わなかった。

それ以上言っても何も答えなかった．．

灰原が、組織の目的の1つの鍵になるな…

今は、何のことが、分からなかった

本当に、あの方である蘭は、
かなり謎めいている。

灰原について、どう思っているんだ？

いろいろと矛盾しているような気が、する

すべて、一体なんなのかわからない！

（新一の動きが止まった。

シェリーのことを気にしているのかな？

私も、我を忘れてしまったなあ・・・！

それで、シェリーを殺そうとした．．

シェリーは、すべてを知っている存在・・・

そして、同じ痛みを背負った。

だから、シェリーを殺してはいけない！

それに、私以上にいろんな痛みを感じている。）

蘭は、つらく悲しそうな顔をして、

手に持っている拳銃を離した！

手から地べたへと、拳銃が落ちていく．．

地べたに落ちてある拳銃をコナンは、

そのままにしておいた。

その拳銃は地べたに置かれたままである。

オレは、ただ、蘭の様子をずっと見ているだけ。

そう．．ずっと。

4 初：シルバートレットと罪人になったエンジェルの決戦へ後編（後書き）

三輪野助「すみません。

話が、全然まとまっていません！文章も下手なもので．．

コナン「そんな今さら、わかりきったことだろ？

何改まってんだよ．．」

三輪野助「コナンは、黙ってなさい！」

表情お願いしますm（――）m

5 久しぶりに見た偽りの優しさ

蘭は、悲しそうな顔をしていた。

でも、それを覆い隠すのが、
ちよつとつらい！

でも、蘭は強がっている！

「新一．．決戦を始めましょう！
あなたの本当の実力見て見たいわ．．」

「ああ．．．　　蘭がいいなら、オレは、戦うぜ．．」

また再び冷たい夜風が吹く

冷たい空気が、周りに漂う！

2人は、戦うばかりで何も考えている余裕はない．．

本能的にお互いに、ぶつかっていく！

「オイ…コナンと蘭

お前らこんな河原で何をしているんだ！」

突然、この貴重な決戦を

邪魔する者が、2人の目の前に現れた。

それは、小五郎だった…

ちなみに、小五郎は、今日依頼人の家に訪ねていた。

小五郎は、依頼の仕事が、

終わった時に偶然河原の方を通りかかった…

コナンと蘭は、あまりに突然小五郎が来たので、
2人とも変な方向を向いてしまった。

2人ともそっぽを向くという体勢になって、

不自然だ…

（おっちゃんには、蘭が黒の組織のあの方だとは、言えねーな…
しばらくは、黙っているつもりだ…

悪いな…おっちゃん

この傷も、おっちゃんにきずかれたらヤバいな…）

（ヤバい！お父さんに私が黒の組織のあの方だとバレてしまう。）

小五郎は、2人の方に近づいた。

「オイ…何やっているんだよ．．」

「えつとね…」

小五郎おじさんが、帰ってこないから、
蘭ねえちゃんと一緒に

河原に行つて遊んでいたんだよ．．」

「コナン君が、河原に行きたいって言ったから．．」

コナンは、肩の傷を

蘭は、左腕の傷を

手で、隠している。

（フン… コナンも、いつもマせているくせに、河原で遊んでいる
んかよ．．

所詮ガキは、ガキだな．．）

小五郎は、一本タバコを吸った。

全く何も疑っていない様子だ．．

とりあえずほつとした．．

「帰るぞ…」。

コナン、蘭置いてくぞ．．」

1人たつたと歩く。

「あ、お父さん待つて．．」

蘭が、小五郎を追いかける。

いつもどおりの蘭の声．．そして、表情に戻っている。

ついさっきまで、オレを殺そうとしていた蘭とは、

全然雰囲気が違う．．．

オレは、妙な違和感を感じる。

オレは、座り込んだままだ。

「ほら… お父さんも帰って来たところだし、コナン君も、

家に帰るよ．．．」

「あ、でもボク新一にいちちゃんの母さん人の家に行くから．．
久しぶりに会うから
行きたいんだ」

「あら、そう なら新一の家に行ってもいいよ!」

「でも、その前にボク

蘭ねえちゃんに話したいことがあるの・

蘭ねえちゃんちょっとこっち来て!」

コナンは、蘭を手招きする。

帰りかけていた蘭は、

コナンの方に近づいた。

「なーに、コナン君・」

「くれぐれも、おっちゃんに危害加えるなよ・」

コナンは、小五郎に聞こえないよう、

小声でつぶやいた。

「何言っているのよ!

いくら私が、組織のあの方と言っても、
自分の親を殺したり、傷ついたり
しないわよ!」

蘭も小声でしゃべった。

少し遠くで、待っている小五郎には、

コナンと蘭の会話は、
聞こえていない。

また暇つぶしにタバコを一本吸っている．．

そして、道にそのタバコを捨てる。

タバコは、夜風によって運ばれる。

コナンと蘭の会話が、ようやく終わったみたいだ．．

そして、蘭は、小五郎のいる方に行った。

「バイバイ、新一．．」

（えっ．．）

蘭は、いつもの優しい声で、

オレのことを『新一』
と呼んだ。

いつもとは違う妙な違和感を感じた。

「オイ… 蘭！」

「何！！お父さん．．」

「今なんて 言った！」

「別に・・・
何でもないわ．．」

蘭とおっちゃんは、
家までしゃべっていた。

オレには、その姿は

いつもの明るく優しい蘭が、

しっかりと見えた。

さっきまで、あの方として、
オレの目の前にいた蘭とは、

とてもじゃないけど、

同一人物とは、思えない。

でも、実際は、同一人物だ．．

いくら楽しそうにおっちゃんとしゃべっていても、

傷だけは、

ずっと隠しながら家に帰っている．．．

傷は残ったままだ．．

オレは、しばらく河原にいた。

雑草をさけて座り込んでいる．．

オレは、戻したい．．

あの優しさが、偽りじゃなく、

本当の優しさに戻したい．．

蘭をもとの白に絶対に戻す。

オレは、覚悟の上で、
蘭のことを誓った！

5 久しぶりに見た偽りの優しさ（後書き）

三輪野助「なんかタイトルあまりしっくりこないなあ。」

コナン「まったく、話全然まとまってねえじゃねえか！

いつまでたつても成長しねーな全くお前は」

三輪野助「それを言うな．．

とりあえずランキング50位キープしています！」

コナン「でも、もうすぐナツキさん抜かされるくせに．．

あの小説の方が面白いみたいだからな．．」

三輪野助「まあ、とりあえずキープするつもりだよ」

表情お願いしますm（――）m

6 蘭の心の中で秘められている気持ち

いつもの帰り道・・・

新一と別れた後、

帽子をかぶった女の人が、
私の前に現れた・・・

その女の人は、全身真っ黒だった。

何か私に、話したくてたまらない

彼女は、そんな表情をしていた。

私は、その当時幼かった。

まだ小学2年生で、
彼女のことを、わからかった。

彼女は、私をずっと見ていた・・・

「あなたは、いい人ですか？」

私は、何気なく聞いてみた・・・

彼女は、首をふった。

「いいえ．．私は、罪人．．．
心が、黒く染まっているわ．．」

彼女は、うつむいて
つぶやいた．．．

助けを求められている．．

そんな気が、した。

蘭は、起きた。

頭を抱えて、フツと笑った．．

またこの夢か．．

昔のことを思い出すなあ．．．

結局私は、彼女を静寂から救い出すことが、
できなかった．．

ねえ、新一．．．

罪人の傷は、まだ残っているのね．．

あの方だという立場ってつらいんだよ．．．

忘れていたわ．．

朝食を、作らなきゃ．．

えっーと今日は、

お父さんと私の２人分作るんだよね．．

２人分？

そっか、コナン君の分は、作らないんだ

彼は、私の前から消えたから．．

いつも朝は、

『蘭ねえちゃん、おはよー』

って必ずいつてくれたのに．．

今日は、その声が聞こえてこない。

でも、しょうがない．．

私が、彼を裏切ったのだから．．

もう彼との思い出は、０になった。

何もかもなくなった。

これからは、私たちは、
敵どうし・・・

彼と戦うことになっている・・・

新一、あなたには

勝つ・・・

また、お互いに傷を増やしていく・・・

もうそれは覚悟している・・・

朝食は、適当に作った。

とりあえずお父さんの分だけ作ることにした。

私は、自分の部屋へ行った。

そして、自分の部屋で考えこんだ。

組織って自分勝手だなあ・・・

そう思った・・・

あの方である私の気持ちも知らないで・・・

哀ちゃんは、こんな私のことを

明美さんと同じようにいい人だとおもっているけど、

でも実際にいい人は、

明美さんだけ・・・

私は、罪人だ・・・

哀ちゃんが、

おもっているような
いい人じゃない・・・

今の私には、コナン君も新一も
いない・・・

どうすればいいの・・・

ピンポン♪

「蘭く向かえにきたよ・・・」

園子の優しい声が聞こえる。

私は、慌て部屋を出て、
学校の支度をする・・・

「園子、ごめん・・・
遅れてしまつて本当にごめん・・・」

「いいよ　いいよ・・・
ちなみに、この眼鏡のガキンちょも、
学校に行きたいだつてさ・・・」

えっ・・・新一、いやコナン君が、

なんでここに？

「蘭ねえちゃん、ボクも一緒に学校行つてもいいかな・・・」

無邪気なふりをする新一・・・

心底何を考えているか、わからない・・・

新一のことだから、
私をはめようとしても
しているはず・・・

私は、慎重に深く考えた・・・

「蘭、どうしたの？」

怖い顔しちゃって・・・
何かあったの？

私は、できる限り蘭に協力するよ・・・」

私は、正直心が不安定である。

「ううん、大丈夫・・・」

なんでもないよ・・・

後、園子心配してくれたんだね・・・

ありがとう・・・」

本当は、なんでもないわけじゃない・・・

しかし、本当のことを言うと

園子を傷つけてしまうから、

言えなかった・・・

私は、登校の途中も不安でいっぱいだった・・・

蘭は、園子にはいつもどおりだ・・・

普通にしゃべりながら、

学校へ向かっている。

さっきのオレを見た時の険しい顔は、

していない・・・

明るい表情で、何気なく仲良くしゃべっている・・・

その表情を見てとりあえずは、
安心した・・・

でも、心の奥に隠れている

蘭の気持ちをしりたかった。

だからオレは、蘭の様子を探りに

帝丹へ行った。

6 蘭の心の中で秘められている気持ち（後書き）

三輪野助「やった！

ランキング50位から36位になった！

奈津美さん、ありがとうございます」

コナン「オイ、蘭が会ったという女は、誰だ？」

三輪野助「誰だろね・・・」

コナンには、絶対に教えない！」

コナン「・・・」

評価お願いしますm（（（m

7 過去へのオモイ

「そろそろ私に、例の物作ってくれない？」

暗闇の中、突然全身黒の1人の女が、現れた。

縄で、手足縛られている男が
か細い声でつぶやく。

「焦るでは、ない・・・」

それにアレを、作れるとは、限らない。

いや、むしろ失敗する・・・

今までに、成功した者は、1人もいない・・・」

女は、その男を睨みつける。

「我々 組織は、誰もが、

開発できない物の研究を進めなければならないのよ・
死にたくなければ、進行しなさい！」

男は、歯を食いしばり

例の研究を行った。

女は、無言で足音だけたてて

暗闇のような部屋から去ろうとした・・・

「その前に、君に聞きたいことが、ある・・・」

男の声に、反応し、
足を止めた。

「何・・・？」

「あなたの正体は？・・・そして名前は？」

「名前？そうね・・・」

3つの偽名を持つ者・・・

それで満足かしら？

研究頑張ってくださいね・・・」

再び、女は暗闇の中、

派手に靴の音をならした。

男は毎日のように、

例の研究を続けていた。

その物が もうすぐで、完成する。

そう、あと一步で・・・

研究を続行した。

その時、ものすごい爆発があつた。

その衝撃で、男は死んだ。

研究所も何もない状態だった・・・

この研究は、

失敗する可能性は、高い！

それと同時に死ぬ可能性も、

非常に高い！

とても危険すぎる研究だ・・・

女は、そのことを知っていて、

わざと男に研究をさせた。

そして、本当のことを知らなかった彼女は、

ずっと孤独の中戦っていた。

かわいそう……

私が、悪かったのかもしれない！

「……ん……らん」

誰？この声の主は……

私を呼んでいるの？

「蘭！！つてば

」

えっ…その・こ

あつ、そっか

ここは、学校！

授業中だったんだ・

それにしても私、
どうしたんだろう……

朝から、変だ・・・

あの夢を見てから・・・

過去を思いだしてしまっ・・・

「蘭！ 蘭・・・
どうしたの？」

あんた今日何か変だよ・・・

風邪でも、ひいた？」

「ううん、大丈夫・・・
本当に大丈夫だからね・・・」

大丈夫なんてウソ・・・

ウソに決まっているじゃない・・・

本当は、全てつらい・・・

過去も現在も私は、罪人・・・

でも、園子に余計な心配は、

かけたくない・・・

園子には、絶対に言えない

組織の存在を言えるわけが、ない・・・

「蘭、一体どうしたの？」

また怖い顔して・・・」

「別に怖い顔をしたつもりは、ないよ・・・

コナン君、別に私普通だよね・・・」

「うん、別に普通だよ・・・」

一応、

コナンも蘭と園子の間で授業を聞いている。

コナンは、相変わらず、

子どもっぽい口調だ・・・

やべーな・・・

園子も気づいていたのか！

蘭の様子が変だったことに・・・

組織は、蘭以外全滅したかと

思ったが・・・

これだけじゃなさそうだな！

ヤツらの中に何か蘭に関する

手がかりが残っているかもしれない・・・

調べる価値はありそうだな・・・

ほとんど不可能かもしれないが、

いつもの蘭に戻せるような気がする。

これは、蘭の過去を知るべきだな・・・

7 過去へのオモイ（後書き）

三輪野助「過去になにがあっただんでしょね…」
コナン「知るか…」

お前の説明が下手だから、わからねー」

三輪野助「ランキング26位になりました。」

コナン「偶然じゃねえの

っていかお前そろそろテストじゃねえか！」

三輪野助「いいの！」

評価お願いします。

8 1人にしないで．．

――下校――

コナン、蘭、園子の

3人は学校の校門から出た。

彼らは、何気ない会話をしている。

会話を聞きながら、

蘭は、過去を思い出す。

――＊――＊――＊――＊――＊――

まだ頭から、離れない．．．

あの女が存在．．．

そればかり頭によぎる。

これは、誰にも言えない。

仲間には、なおさら言えない．．．

「蘭、やっぱり変だよ．．．

私が、話している時も 怖い顔しているじゃない．．．」

「本当に大丈夫よ．．．」

蘭は、苦笑いをした。

コナンにも、蘭の様子が変だとわかった

オレは蘭に何か過去にあった・・・

そう確信した。

蘭の謎を解くには、
組織のわからなかった情報を
手に入れなければならない。

奴らは、蘭の部下で
あるから 蘭の過去も
知っているかもしれない・・・

ジン達を倒すまでは、

奴らのアジトがわかっただけで、

情報は不十分だった。

奴らの各地にあるアジトは、

完全になくなっていたいるけど、

本部は、残っている。

そこに行けば 奴らの痕跡が、

残っているかもしれない・・・

オレは、そこに蘭の情報があるかどうか
知りたい。

「蘭ねえちゃん、

あのね、博士が作った

新しいゲームやりたいから、

博士の家に行つていい？

後、今日は家に戻れないかもしれない・・・」

「ダメよ・・・」

蘭は、コナンをきつくしかつた。

「ら、蘭 何も怒らなくても・・・

いいじゃない・・・

コナン君は、ただゲームを
やりたいだけ何だよ・・・」

「ダメよ、コナン君の保護者として、

勝手な行動はさせたくないのよ・・・！

それにコナン君、好奇心旺盛だから、

また何かの事件が、

あるって聞いたら博士と一緒に

どっか行ってしまうじゃない・・・

いつも いつもそんなことばかりじゃん・・・

これ以上、コナン君が、危険なことに

あつてほしくない・・・

1人にしないで・・・」

蘭は、とても悲しそうな表情で、

オレにうつたえた。

これが、本当の蘭の素顔かもしれないな・・・

だからこそ、蘭を信用したいから、

オレは、組織の本部に行きたい！

優しい蘭に

本当に戻せるような気が、する。

オレは、今までの蘭と一緒にいた日々が、

ウソでは、ないと証明したい・・・

誰が止めようと絶対に本部に行く。

覚悟だつてきめなければならないだろう・・・

それでも行く。

本当の蘭が知りたいから・・・

「ごめん！蘭ねえちゃん

もう博士と約束しているから・・・

約束は、破れないんだ！

じゃあね・・・」

オレは、慌てウソをついた。

本当は、蘭にウソなんてつきたくない・・・

でも、今だけの辛抱だ！

自分に言い聞かせた。

「あ、ちよつと・・・新一」

思わず『新一』

って言ってしまった。

それだけ新一には、傍にいてほしい・・・

その気持ちは、今もある。

「新一君なんていないわよ！

蘭、なに言っているのよ？」

やっぱり園子は、新一の事情も

組織のことも知らない。

オレは、蘭と園子を置いてって

1人で、

本部へ向かった。

2人から離れていく。

オレが、だんだん遠くに行ってしまうと、

蘭は、泣きそうになる。

新一は、また私を置いていった・・・

私を調べているの？

まあ、私が組織のあの方であるから、

調べられるのは、

当然だけど・・・

また私達、

お互いに傷を増やしていくの？

また戦うの？

どうなのよ・・・新一・・・

もう新一は、本部へ行ってしまった。

組織の情報を得て、

そして、

蘭を知るために・・・

8 1人にしないで・・・(後書き)

三輪野助「やった！ランキング20位だ！」

コナン「お前テスト前だろ？」

勉強しろよ！」

三輪野助「しますよ！」

一週間前になったら

本格的に・・・」

評価お願いしますm() () m

9 組織のアジト

――組織本部――

見た目から、崩れかけている気味の悪い建物が、

一つ建っていた。

そこは、カラスのようなに薄暗そうな感じである・・・

中は、もっと暗闇に包まれている・・・

ここは、全て黒に染められている・・・

蘭が、こんなところを

アジトにしたとは、思えない・・・

オレは、慎重にアジトの中へと

入った！

さまよいそうな場所・・・

しかし、オレは

博士に作ってもらった腕時計型ライトおかげで、

辺りは、とりあえず見えている・・・

ライトをつけて、適当に探し回る。

オレはライトの光を頼りに手がかりの場所へとたどって行くしかない・・・

目と鼻の先には、

ベルモットの個室が、あった！

ベルモットの部屋に、

入ってみた。

彼女の部屋には、

パソコンが、一台置いてある・・・

あと壁には、オレが写っている写真に

『Cool guy』

そして、蘭が写っている写真には、

『Angel』

とかかれてある・・・

一枚だけ、灰原の組織時代の写真があった！

それは、シェリーとしての姿である・・・

シェリーの顔の真ん中あたりに、

×印が、あった！

写真の下には、

『S h e r r y』

ってかかれてある・・・

灰原の他にも、写真の真ん中に×印と

英語で、組織のコードネームが、
かかれていた。

オレの推理では、この写真の人たちは、
組織を裏切った人物のことを

表していると思う。

『C o o l g u y』は、オレの本当の正体についてだと思っ

問題なのは、ベルモットが、蘭を

『A n g e l』

って思っていること・・・

ヤツらは、全員蘭のことを

エンジェルと思っているみたいだが、

一体蘭は、過去に何を

ヤツらに行ったのだろうか！

それと、ベルモットは、

あの方のお気に入りでという情報をよく聞く。

つまり、あの方である蘭が、

ベルモットを気に入っていつている・・・

そういうことになる。

じゃあなぜ蘭は、ベルモットの

ことが、お気に入りでなんだろうか！！

それを知るためには、

ベルモットの情報も大切だということになった！

ベルモットを調べるには、

苦労しそうだ。

なぜならいつも秘密主義で、

何を考えているのか

わからないから・・・

ベルモットの情報を得るのは、難しいことだと思う・・・

長い時間調べなければならぬ。

ちなみに、ベルモットの机の上には、

酒のビンがある

おそらくベルモットが、飲んでいたお酒だろう・・・

ほかに、たくさんのお酒のビンが、置いてある・・・

ちょっとは、情報が入った！

まだ蘭を信じてやることは、

無理だ・・・

もう昨日のような戦いは、やりたくない。

戦いが、再び始まる前に

蘭を本当に、信じてやりたい。

今は、正直半信半疑で、

どうするべきか

迷っている・・・

アジトの中だけじゃなく、

外も暗くなっていた。

オレは、アジトから、出て外の景色をながめる。

真っ暗闇の世界のような街になっている・・・

夕日は、完全に沈んでいた！

少し蘭に申し訳ない気持ちが、あつた

だから、オレは、蘭に

電話をした。

「はい、もしもし毛利探偵事務所・・・って新一・・・

こんな時間どうしたのよ・・・」

「オレ、蘭を信じているからな・・・」

オレは、それだけ言って、電話を切った！

9 組織のアジト（後書き）

三輪野助「なぜ、蘭がベルモットのことお気に入りなのか説明するつもりです！

* 蘭の願望

* 組織とは．．

* 蘭があの方である理由

* 蘭の本当の気持ち

* 謎の女について．．

* 蘭の蘇らせた大切な人について

* シルバードプレートについて

* 蘭が持っているシルバードプレートを上回る無敵の力

* 男が、やらされた危険な研究について

* 蘭から見た灰原「シェリー」

なども説明したいです！」

コナン「でも、お前テスト前だろ？

そんな説明する時間あるのかよ．．」

三輪野助「（は．．しまった）すみません…

毎日更新する時間ありません！

たまに更新するかもしれません」

評価お願いしますm（――）m

10 手がかり

オレは、適当にアジトの中を

調べている。

少し寒い空気がどっかの部屋から、
入ってきた。

オレは、その部屋に入った。

寒かった。

いや、冷たい・・・

ただ単に冷たいのではない。

凍りつくような冷たさである。

オレは、部屋の冷たさに耐えれなかった。

一旦部屋から出る。

プルプル・・・

電話が鳴っている。

「もしもし、あつ博士か」

「新一君、蘭君が組織のあの方って本当なのか！」

「ああ、そうだけどなんで博士が知っているんだよ…」

「優作君が知っていたんだよ！」

ワシは、優作君から聞いたんだ。

彼の推理で蘭君があの方って導き出されたんじや。」

「そうか・・・」

（父さんも蘭があの方であることをわかって
いたのか・・・）」

「新一君・・・」

「絶対に組織に勝つんじやよ！」

「ああ、わかっているぜ…」

蘭を絶対にもとに戻すからな・・・」

「実はワシには、組織に、対する
恨みがあるんじや・・・」

ヤツらは、ワシの兄を殺したんじやよ…
理由は、知らないんじやが・・・」

「博士の兄は、どんな人だったんだ？」

「ワシの兄も悪い人だったんじや・・・」

人を殺したこともあるんじや・・・

まあかなり年がはなれているから

全然兄のことは記憶がなくてのお・・・

兄は、ワシが物心がついたころには、

もうすっかり大人だったんじゃない。」

博士は、小声でつぶやいた。

それにしても博士が物心がついた頃に

博士の兄が大人になっていたということは、

現在は相当年をとっているんだなあ・・・

兄は博士の小さいころには、すでに大人っていうことは、

約20歳ぐらいはなれている・・・

博士が今52歳だから、

兄の年は70〜72歳っていうことになる。

「博士、兄の年は何歳なんだ？」

「71歳じゃ・・・」

ちょうど71歳の誕生日の

一週間後に殺されたんじゃない。」

「そうか・・・」

じゃあちよつと調べるからな。

博士、じゃあな…」

オレは、電話を切った。

博士の兄のためにもがんばらなきゃ　・　・

オレは探偵なんだ。

可能性がある限り調べる。

冷たい部屋の中に隠されている蘭に関する

手がかりに近づくために・・・

たとえどんなに小さい手がかりでも、

決して見逃さない。

オレは、部屋を荒らさないように一つ一つ慎重に調べている。

オレの近くで、なにか落ちてきた気がする。

オレは、振り向いた。

そこには写真が一枚落ちていた。

写真をよくみて見た。

右に若い頃の博士、

左にちよつと老けているおじさんが写っている。

これは、おそらく博士と兄の写真だろう。

少々ほこりが、かぶっている。

一応ほこりを取った。

そして手がかりになるその写真をもう一度よく見た。

他の場所も探した。

机の中にもう一枚の写真が、

入っている。

その写真には、

年寄りのおじさんと

小学3年生の頃の蘭が写っている。

オレは、目を疑った。

おそろおそろ写真の裏を見てみた。

《ピスコ、ありがとう！》
って書いてあった。

しかもそれは、蘭の字．．

ということだ！

蘭とピスコの間は、

どういう関係なんだろうか．．

確かにピスコは部下だから、

関係はあるけど

それとは違う。

何か蘭の重要な過去にピスコが、

関わっていると推理する。

《ピスコありがとう！》の意味は全然わからない

ピスコは重要な人物である。

ブルルル．．

また博士から電話がかかってきた。

「はい、もしもし…博士か．．．」

「ああ、ついでにワシの兄は、

偽名で柊山憲三って名乗っていた。

ホレ、杯戸シティホテルの
ヤツらとやりあった時の事件の犯人じゃよ……」

「ああ、わかっているぜ…博士」

オレは、必ず蘭の過去を

みつけたす…

10 手がかり（後書き）

三輪野助「テスト前にちょっと書きました

今回は、ものすごく下手になった気がします！」

コナン「評価が下がっているぜ……」

評価お願いしますm（――）m

11 それぞれの思い

「おじさん・・・博士

一緒に遊ぼうよ！」

「ワシはいいんじゃないか・・・

新一君とは、一緒に遊ばなくていいのか？」

「いいのよ・・・

アイツは、推理オタクだから

どーせ部屋にこもって推理小説でも

読んでいるに決まっているじゃない・・・

それより早く遊ぼうよ。」

「あ、ああ　じゃあ兄さん一緒に遊んでやれ・・・」

「しょうがないなあ・・・

蘭ちゃん一緒に遊ぼうか！！」

「うん。」

私は、幼い頃博士の家で博士の兄さんや博士とよく遊んでいた。

博士も兄さんもととても優しくかった。

あの日々は楽しかった．．

この頃は、すでに冷淡な組織に入っていた。

あまりにもおそろしい場所．．

しかし、こうして博士やおじさん（ピスコ）と遊んでいると

安らいでくる。

気持ちが落ち着く。

私は、博士の兄さんと記念に写真を撮った。

その写真に写っている私と兄さんは、とても笑顔だった．．．

お兄さんは、光り輝いていた。

でもその後、博士の兄さんが組織に入ってくるとは、

思わなかった。

最初ピスコが、組織に入ってきたときは、

博士の兄さんだとは気付かなかった。

その人物は、かなり年寄りだった。

博士の兄さんとは顔が全然違うし、

顔もかなり老けていた。

まさか顔を整形していたとは、

幼い私では、思いつかなかった。

なんで・・・どうしてあなたは組織に入ってしまったの・・・

ねえ、教えてよ...

ピスコ・・・

あの楽しかった日々は一体なんだったのよ...

どうして人殺しをしてしまったの？

あなたには、人を殺してほしくないのに・・・

「蘭・・・オイ蘭！」

蘭は、慌て声が聞こえてくる方向へ

振り向く。

そこには、小五郎がいた。

「お父さん、何なのよ...

びつくりするじゃない。」

「それはこっちのセリフだ。」

オイランさつきから、
何ぼっーとしているだ！

飯は、まだか？」

はっ、いけない。

今は、お父さんの夕食を作っているんだった。

またいつの間にか過去を思いだしてしまった。

なぜか今日は、よく過去を思いだしてしまうわね・・・

ピスコと遊んだ事も思いだした。

ピスコが博士の兄さんだと気づいたのは、
つい最近だったわね・・・

ピスコの部屋に入った時に

私は机の中に入っている写真を見てしまったの。

その写真には、博士の兄さんと私が写っていた。

その写真には、

「あの方へ

私は、黒く染まってしまった。

私は、罪人・・・

私が殺人を犯しても止めないでほしいです。

たとえあの方でも、私は罪人らしく犯罪を犯すって決めたから止めないでほしいです。

でも、あなたと遊んだ日々は楽しかったです。」

写真に細かく書いてあった。

どうやらピスコは、写真を私に渡すつもりだったみたい．．

私は、写真に書いてある言葉を消した。

そして、

「ピスコありがとう！」
って書いた。

私は、ピスコが楽しかった日々を覚えていたのが嬉しかった。

だから、ありがとうって書いた。

罪人になっていくピスコにも私は不満があった。

今の気分は、喜怒哀楽

新一やピスコにも、憎しみがある。

でも、私はあなた達のこととは

大切だと思っている。

それでも私は大切な人を自分の手で

倒さなければいけない。

私は、自分で汚れなければならない。

私があの方である限り・・・

夕食は、とりあえず作った。

「お父さん、ご飯作ったよ...」

「ああ、そうか・・・」

お父さんが悲しそうに一言つぶやいた・・・

私には、そう感じた。

新一は、無事なのか

心配でたまらなかった。

心配している間に時間は過ぎてゆく。

私が罪人であることは消えていないまま・・・

- - - 組織本部 - - -

もうすっかり次の日になっている。

それでもオレは、調べ続ける。

ただわかっているのは、

蘭の過去にピスコが関係あること・・・

確かピスコは、

ジンに殺された。

ジンの部屋に何かピスコを殺した理由が
隠れている！

それに蘭が関係している！

オレはそう推理した。

ジンの部屋には、誰もいない。

冷たい風だけが、

入ってくる。

しかしジンの部屋には、特に何もなかった。

相棒のウォツカなら、
ピスコや蘭の情報を
知っているだろうと思い、

次はウォツカの部屋に入った。

一つ一つ慎重に調べた。

すると、机の中に日記が隠されている。

オレは、中身を見た。

それは毎日の殺人を犯した記録が書かれている。

どうやら殺した人間の顔や名前を忘れるジンのために

ウォツカが殺した人の名前を記入しているみたいだ。

オレは、ピスコが殺された日に書かれた記録を

先に見た。

それにはおそろしいことが書いてあった。

『今日は、あの方の命令で兄貴はピスコを殺した。
と書かれている。』

オレは、一瞬硬直した。

あの方って．．蘭だよな．．

蘭が、ピスコを殺すように命令していたのか．．

蘭が人を殺すことを
命令した．．

そればかりで頭がいっぱいだ。

蘭はピスコと写真で写っているとき輝いていた。

ピスコのことを大切にも思っているのだと思った。

それなのに蘭はジンにピスコを殺すことを命令した．．

どうしたら蘭を信じることが、

できるんだ。

それに蘭は、ピスコのことを大切に思っているのか

殺したいのかどっちなんだ？

オレは、どうすればいいんだ．．

11 それぞれの思い（後書き）

三輪野助「タイトルも話もいい加減ですみません！
テスト前ですけど、

息抜きで書いてみました。」

コナン「でも、めちゃくちゃひどくなっているぜ

つつつか博士とピスコが兄弟とかありえないだが・・・」

三輪野助「すみません！」

評価お願いしますm(_____)m

12 それは真実

今小五郎は、沖野ヨーコの番組を見ながら

1人で盛り上がっている。

蘭は陽気な小五郎がうらやましい・・・

今の自分とは違う。

私は組織のあの方・・・

「新一の敵

今まで新一を騙し続けた。

ピスコを殺すようにジンに命令した。

すべて私が悪い・・・

私のせいでピスコは死んだ。

これで良かったのだろうか・・・

今からだけ後悔している・・・

蘭は悲しそうな顔をしている。

今にも泣きそうな顔・・・

蘭は自分の部屋へ行った。

蘭の後ろ姿はとても寂しいものを感じた。

小五郎は決してその姿を見逃さなかった・・・

テレビの電源を消した。

そして蘭の様子見に行った。

蘭は部屋でうずくまっている。

コナンはまだ薄暗いアジトの中。

自分の疑いを晴らすためだけに

組織のアジトへ行った。

新一ってこういう捜査するのが好きなのね。

少しの可能性にかけて私を信じているんだね・・・

でもいくら私を信用していたとしても

疑いなんて晴れるわけがないのに・・・

私がピスコを殺したみたいなものだから・・・

蘭が部屋で組織のことを悩んでいる時に
小五郎は慌て蘭の部屋の前へ行く。

トントン

「蘭、オレだ！」

ドアをノックしたのはお父さんだ。

私は部屋のカギを開けようとした。

「いやカギは開けなくていい。」

「お父さん・・・何の用？」

「なあ・・・コナン見てねえか？」

「私も見てないけど・・・」

「そうか・・・」

最近コナンの顔見てねえな。

どこ行っちゃったんだ・・・あのガキは・・・」

新一は私があの方としての組織に貢献しているという

疑いを晴らしに行ったの。

そんなこと絶対に言えない。

たとえお父さんでも組織の事は言えない。

私は黙ってうつむいた。

お父さんは私のことを心配してくれた。

「蘭、何黙り込んでいるんだ！」

「うつん…別になんでもないよ…」

「そうか…様子が変だぞ…」

「本当になんでもないって。」

蘭は絞ったような声だった。

小五郎は一旦間をあける。

「コナンのこと…心配か？」

「うん…心配だよ…」

そんなの当たり前じゃないの・・・

こんな暗い時間まで私のために捜査なんて

やっているお人好しの新一を

ほおっておけるわけないじゃない。

「オレも心配だ！

コナンとはいろいろと思い出があるからな・・・

あのガキ結構使えるし、

おもしろかった。

事件の犯行現場コナンを殴るのが

当たり前みてえなもんだったもんな・・・

そんな楽しみもなくなっちゃったな・・・

ちょっと寂しいんだ。

悪いな。蘭」

ドアごしでしゃべりかけてきた小五郎は、

蘭の部屋の前から去った。

お父さんも新一いや、コナン君のこと

心配しているんだ。

「痛．．．．」

私は腕を押さえた。

昨日の傷がさらに痛む。

罪人の証となる痛々しい傷がよみがえった。

新一も私のせいで肩に傷を負った。

また人を1人傷つけてしまった．．．．

ピスコだってそう．．

彼を殺すのが正解だと思っていた。

ピスコを殺す以外に方法がなかった・・・

そして自らの手は汚さずにジーンに

殺すように命令してしまった・・・

私はどこまでも卑怯だ。

新一は今も組織のアジトの中。

きっと…

きっと…新一もウォッカの机の中に

入っている日記を見て

しまっただろうね・・・

その日記の内容の一部には、

『今日はあの方の命令で兄貴はピスコを殺した。』

って書いてあるところを見てしまったよね・・・

でもそれは事実。

新一はこんな私のことをどう思うのだろう

――組織本部――

コナンはなんともなんとも

ウォッカの日記を読み返していた。

何回読んでも日記の文字は変わらない。

蘭がピスコを殺すように命令したことが
書いてある。

オレは自分の目を疑った。

しかし文字が変わらないのは

当然である。

そんなことはわかっているが、

蘭がピスコを殺害を自ら命令したなんて、

信じたくなかった。

オレにはおさえきれない感情があつた。

「くっそお……」

壁を思いつきり蹴った。

この夜中コナンがあまりの悔しさに

絶叫したことなど誰も知らなかった……

12 それは真実（後書き）

三輪野助「いや、テストただけで投稿しました。
なんかおかしい話になっていますよね・・・」

コナン「テスト勉強はどうした？」

三輪野助「とりあえずやっているよ・・・」

コナン「しばらく経ったらかなり評価が下がったなあ
…

みんなこんな駄作よろしく頼むぜ！」

評価お願いしますm(_____)m

13 再び決戦のときが来た・・・

私は新一に迷惑をかけてしまった・・・

新一はピスコを殺したことどう思っているのかな？

ピスコを殺してしまった・・・

これはもうどうしようもないこと。

新一、おそらくあなたは私を許さないだろう・・・

人殺しとでも思うでしょ。

私は、信頼をなくした。

私はもう新一と戦うしかない。

命をかけての死闘を再び始めなければならない。

蘭はまだ部屋でうずくまっている。

死ぬ覚悟もしている。

でもその前に言いたいことがある。

哀ちゃんに伝えたい。私が組織のあの方だということを

どうしても伝えたい。

哀ちゃんは私のことを

明美さんのようにいい人だと思っていても

実際は違う。

真実を言ったら哀ちゃんはどう思うだろう？

悲しむのかな？

でも私があの方という

真実を知らないまま

明美さんの影を追っているなんて、

とてもかわいそう・・・

どーせ死ぬならせめて本当のことを

哀ちゃんに伝えたい。

私は、哀ちゃんに自分のことを全て話すと決めた。

蘭はさっそく博士の家へ向かった。

家から急に飛び出した。

あまりにも悲しそうな顔をしながら、

家を出た・・・

「オイ、蘭待てどこ行くんだ？」

心配する小五郎の叫び声も蘭にはまったく聞こえなかった。

私はひたすら必死に走っているだけ・・・

目指す博士の家に向かう。

でも哀ちゃんに組織のことを話した後は、
私は新一と戦うことになる・・・

新一と戦う・・・

私は、たち止まった。

たちながらぼーとしている。

それから涙を少しこぼした。

なんで私・・・泣いているの？

前からいっぱい新一を

傷つけまくったじゃない・・・

銃口を新一に向けたじゃない・・・

今だって新一と

戦うつもりだったじゃないの・・・

それに新一は探偵。

私は罪人。

敵同士の関係。

お互いに戦うことは

運命だった。

その運命からは逆らえない。

私と新一はもう戦うしか手段がない。

どうしようもない・・・

それなのに・・・それなのに・・・

私は、新一と戦うことを戸惑っている。

私の中には、まだ本当の白い心があったのだろうか・・・

この世で最も大切な新一を

失いたくない・・・

そんな気持ちはまだ私は持っていたんだろうか・・・

私にも良心があったのだろうか？

良心なんて組織のメンバーは失ってしまった。

全てが冷酷だった。

私だって新一とジンたちが、

戦っている時にすっかり新一のこと

あざ笑っていた。

私自身も冷酷な人間になってしまったと

思った。

今は少しだけ、良心を持つようになった。

でも、もう遅い・・・

私はすでに冷酷な道を歩みすぎたから・・・

これ以上ウソの優しさを見せることもできない。

生か死二分の一。

そんな確率に

かけるしかない……

死ぬ覚悟もある！

だから最後に哀ちゃんに会いに行く。

蘭の心は切り替えをした。

蘭は再び走り出した。

走っているとだんだん見えてくる。

博士の家が見えてくる。

そしてだんだん大きく見えてくる。

新一の家の前で人がうつむいている姿も見えてきた。

暗くて誰がよくわからないけど、

小さな少年がうつむいているのはわかった。

最初は、気付かなかったが

とても可哀想な様子だった。

それは疲れきった風だった。

私はとても気になって声をかけた。

「どうしたの？って新一じゃない・・・

一体何があつたの？」

そこには、組織のアジトから自宅に帰った

コナンが家の前でしゃがみこんでいる。

コナンは歯を食いしばり

思い詰められた顔で蘭を

ずっと見た。

「なあ・・・蘭ウソだよな・・・
こんなことって・・・」

オレは、ウォツカの日記を

ピスコを殺した日のページにして

差し出した。

「蘭、ピスコを殺せなんて命令していないよなあ……」

本当は、ピスコを殺すように言ったのは
蘭だとはわかっている。

でもこればかりは受け入れたくない……

それにオレには蘭が

ピスコを殺すように命令したなんて

想像もできない。

数秒後、蘭本人からとんでもない発言があるとは

思わなかった。

「ええ…私がジンにピスコを殺すように命令したのよ……」

風に包まれながら、蘭は

一言つぶやいた。

その時の蘭は蘭じゃないようだった……

13 再び決戦のときが来た・・・（後書き）

三輪野助「やっとテスト終わりました。これからはっきり投稿したいです。

なんか下手になりますね…」

コナン「ああ、駄文だせ…

この作者は進歩がねえな」

三輪野助「自分なりに頑張ります。」

評価お願いしますm（）（）m

14 蘭の真実

「ピスコを殺すように命令した・・・」

蘭自ら“殺した”と言った。

オレはその言葉を聞き逃さなかった。

「なぜ・・・殺人なんて命令したんだよ・・・」

蘭、教えてくれ・・・」

蘭はしばらく黙っていた。

とても険しい顔になっている。

「ピスコのためよ・・・」

その一言だけつぶやいた。

蘭はオレに背を向けた。

「オイ、ピスコのためってどういうことだ？」

何も言わなかった。

オレは、何回も蘭に聞いた。

しかし蘭は何も言わない。

その後ろ姿だけが、
とても寂しそうだった。

「じゃあ、新一に組織の目的がわかるの？」

蘭はいきなり意味深なことを言った。

とつぜんのつぶやきにオレは驚いた。

「それは蘭が言っていたじゃねえか・・・

死者を蘇らせる秘薬の開発だろ？」

「それもあるわ。

でももう一つあるの・・・」

「何なんだ？それは？」

「“記憶喪失の秘薬”」

記憶喪失の秘薬。

何だ？

記憶喪失の薬ってどういうことだ？

何に使うつもりなんだ？

「私には、その秘薬が必要なのよ…」

「目的は……」

「目的を話すのね

長くなるけど、いい？」

「ああ、教えてくれればいいよ。」

蘭は、ピスコについてから詳しく説明した。

「あのね、ピスコは本当は

とてもいい人なの。

私の幼い頃にピスコと一緒に遊んでくれた。

ちなみにピスコは博士の兄。

その時は博士と私とピスコで遊んだの。
その日々はとても楽しかった。

私はその頃から組織に入っていた。

組織には冷酷な人ばかりで

全然和めない。

しかし、2人と遊んでいるとても和める。

そんな環境だった。

でもピスコはある日を境に組織に入った。

何がきっかけで組織に入ったかは、わからないけど、

とても残酷な瞳をした

老人に変わっていた。

最初私は、ピスコが博士の兄だとは

気付かなかった。」

「ピスコが博士の兄だという話なら、

博士本人から聞いたよ。

しかもかなり年の離れた兄弟とも聞いたが・・・」

「ピスコを殺した動機はここから始まったのよ…」

最初は別にピスコを殺そうなんて、
思わなかった。

そんなことを思い始めたのは

最近ピスコの正体が
博士の兄だと気づいてからよ…

ピスコは約8～9年間ぐらい

組織に所属していた。

彼は、いままでに何人もの人々を

殺し続けた…

彼は殺人鬼になってしまった。

平気な顔をして人を殺していた。

それは毎日のように
悪魔になって

人を殺し続けた…

その表情は、とても恐ろしかった。

私にも止めることなどできなかった。

もう私には、ピスコを止める手段は一つしかなかった。」

「それが、ピスコを殺すことなのか？」

「ええ．．そうよ

殺人鬼になったピスコを一旦殺しておかないと

また殺人を犯してしまうから．．

もうこれ以上ピスコがいや、

博士の兄が殺人を犯すところなんて、

見たくないから．．．

殺すなんて、そんな方法はダメだと

思った。

しかしそれで殺人鬼のピスコの存在が、
消えるならいいと

思った。

私は齒を食いしぱり

ジンにピスコを殺すように命令した。

そしてジンは、

ピスコを殺してしまった……

死んだピスコは哀れな姿だった。」

「それで今ピスコはどうしたんだ？」

「ピスコはあの杯戸シティ事件が終わってから

こっそり組織のアジトの地下室に

置いてあるわ。

腐らないように保存しているから一応大丈夫だわ。

そして私はピスコを再び蘇らせるために

死者を蘇らせる秘薬を

求めている。

その秘薬でピスコを蘇らせるつもりよ…

しかしそれだけだと

組織の頃の記憶も同時に蘇ってしまう……

だから記憶喪失の秘薬も

求めているのよ…

私はピスコを蘇らせて、

組織の頃の記憶を失わせ

そして普通に過ごしてほしいのよ。

記憶を失うってことは

私や博士と遊んだ記憶も

なくなるけど

また1から仲良くなればいいことだし…

蘭はピスコについてついて

たくさん語ってくれた。

オレにも事情がわかった。

蘭はピスコのこと大切に

思っていることがわかった。

今は夜明け。

だんだんと辺りが明るくなってきた。

冷たい空気が、だんだん溶けていった。

オレは少しでも蘭のことが

分かってよかった。

14 蘭の真実（後書き）

三輪野助「ちようどいい読者数になってから投稿しました。
しかし自分で見ても
?と思います。」

コナン「自分でも自覚しているみてえだな……」

三輪野助「はい、自覚していますよ……」

評価お願いしますm() () m

15 夜明けのあとは．．

今はすっかり明るくなった。

きれいな晴れ晴れとした景色

とても美しい。

オレと蘭は

家の前に立っている。

風も少し吹き弱った。

とりあえず蘭がピスコを殺した理由が

わかった。

そして、蘭がピスコを元のいい人に

戻したい気持ちもわかった。

ピスコのことを話していた時の蘭の表情は

とてもさびしそうだった．．．

ちょっと切なかった。

今はとても明るい。

その明るさ蘭とは違う．．

蘭はさびしそうにうつっているように見えた。

そして、悲しい瞳をしていた。

オレはしゃがみこんでいる。

下から蘭を見上げて見ると

よけい悲しみが伝わってくるような気がする．．．

なんでだろうか？

微妙な沈黙の時間。

ただ過ぎていくだけで
何も変わらないまま。

コナンは沈黙を打ち破った。

「なあ．．．ところで蘭はなぜここに来たんだけ？」

「哀ちゃんに言いたいことが、あるから

博士の家へ向かっているのよ。そこで新一あなたが

家の前でうつむいていたのよ…」

「灰原に一体何の用なんだ？」

「アイツに危害を加えるつもりか？」

「違うわ．．哀ちゃんに真実を伝えるだけ。

私が組織のあの方だということを

伝えたいの．．．

元組織のメンバーとして．．．

そして今までシェリーを怖がらせていたから．．．」

蘭はさつさと博士の家へ行った。

しかしコナンが、博士の家へ行くのを

止めた。

「蘭．．．灰原に真実を言うのは止めてくれ．．

アイツ蘭のことを明美さんと

重ね合わせているんだ．．

蘭はアイツにとって明美さんのように失ってほしくない

そんな存在なんだ!」

「だからなんなの?」

「灰原はきつと蘭のことを信頼しているんだ・

もちろん明美さんのように、

白い心をもっていると思っっている。

そんなイメージが抱かれている蘭が、

組織のあの方だなんて知ったら

灰原は自分を追いつめてたりして……」

プスッ……

コナンは急に倒れた状態になった。

蘭はコナンの腕につけられている

時計型麻醉銃で、

コナンを眠らせた。

幸い蘭が麻醉銃で、コナンを眠らせたところは誰も

見ていない。

コナンと蘭を目撃した人も居たようだが、

あまり気にしなかったらしい。

「悪いわね 新一

あんたは口で言っても

聞きそうにないからこうするしかないのよ…。

私だって哀ちゃんいや志保ちゃんが

今どれだけつらい思いをしているか

知っているのよ…

志保ちゃん、あなたの両親は組織の中での研究を

行っていた。

そして研究中の事故で亡くなった。

いや、正確にはあの女に利用されて

殺されたって言ったほうがいいかな？

しかも志保ちゃんは
かわいそうなことに真実を

知らない。

かけがえのない存在をすべて失って悲しい気持ちも

わかるわよ……」

蘭はコナンを見ながら独り言を言っている。

そしてコナンを新一の家に

置いていった。

新一あんたの気持ちも

わかるよ…

志保ちゃんをこれ以上悲しませたくない気持ちは

とてもわかるよ…

すべて私が悪いのよ…

私があの方でなければ

こんな真実を哀ちゃんに話さなくてすんだのに…

彼女には研究のことも聞きたい。

あの子は両親の研究を引き継いでいるから

何か秘薬について

知っているかもしれない．．

私も志保ちゃんと会う最後になるかもしれない。

そのついでに私が組織のあの方だと

伝えたい。

窓の隙間から、小さな風が入ってきた。

私の髪は少しなびいた。

風は今、とても小さい。

でもこれから嵐のように

激しく私達の周りに吹いていくのだろうか．．．

15 夜明けのあとは・・・(後書き)

三輪野助「めちゃくちゃ下手になります。
なにかいいアイデアがないかな？」

コナン「（おいおい・・・情けねえな）」

三輪野助「コナン今日は珍しく黙り込んでいるじゃない……」

評価お願いしますm() () m

16 私はあなたを裏切り者だと思っていた

ここは新一の部屋。

新一は麻醉のせいで眠ってしまった。
コナン

やわらかな風が窓の隙間から、

入ってくる。

とても心地よい。

ここにいると今までの自分の罪が、

薄くなつていく気がする。

外を見わたせば、

満天の空。

そして真つ白な雲。

私の周りには

自分と正反対なものばかり・・・

新一の部屋から見える景色が、

生き生きとしていて

とてもうらやましいよ…

これから私は博士の家へ行こう！

哀ちゃんいや、

志保ちゃんに秘薬のこと聞きたい。

そして、志保ちゃんにあの方の存在は

私だと伝える。

志保ちゃんあなたはおそらく

組織に恐怖心を抱いていると思う。

私もかつてあなたのことを

裏切り者として

殺そうと考えた。

あなたは確か明美さんを殺したのは、

組織だと言っていた。

志保ちゃんは、

明美さんが死んだ

理由を組織が言わなかったから

A P T X 4 8 6 9 の研究を中止した。

組織に逆らったがために

研究所の個室に閉じ込められた。

その時に A P T X 4 8 6 9 を飲んで

幼児化した。

幼児化してしまい

どこにも行く場所のない志保ちゃんは、

新一の家まで雨の中走り続けた。

そして新一の家の前で倒れていた。

それらの事実を知ったのはつい最近。

組織の新開発の A P T X 4 8 6 9 について調べた。

その結果、幼児化する可能性のある薬だとわかった。

その薬を作ったのも志保ちゃん。

組織に個室に入れられていた時に、

志保ちゃんが失踪していたことから

薬を飲んで幼児化したことがわかった。

あと、志保ちゃんに似ている子を発見し、

幼児化をしたことを確信した。

それまでは、組織が嫌で

逃げ出したのだと思っていた。

それで組織のことを

ばらされる恐れがあるから

ジンに殺すように命令していた時もある・・・

志保ちゃんは、殺しそこねたので

ウォッカの日記には志保ちゃんの記録は書かれていない。

でも事実を知った時、

とてもかわいそうだと思った。

志保ちゃんに殺意を抱いた私は

悪いことをしてしまった・・・

志保ちゃんの今までの過去や状況を

わかってやれなかったこと

謝ろう・・・

謝ったって傷つけてしまったから、
許してくれないだろう・・・

別に許してくれることは

求めている。

罪人の言い訳など聞きたくないだろう・・・

わかっている・・・

言い訳なんて聞いてくれないことぐらい。

でも私はあなたを傷つけたことを謝らなければ、

気が済まない。

私は眠っている新一を

置いてって博士の家へ向かった。

蘭はこのときから覚悟していた。

緊張しておそるおそる家のチャイムを鳴らそうとする。

チャイムを鳴らそうとしたとき、

背後から誰かが来る気配がした。

私は誰か確かめるために

後ろを振り向いた。

「あれ蘭はどこだ・・・？つて蘭・・・」

「お父さん・・・どうしたの？」

「どうしたもこうしたも蘭を探しに来たに

決まっているじゃねえか

蘭、昨日はどこに行ったんだ？」

「とりあえず新一の家に行つて中に入ったよ。

コナン君、新一と親戚らしいから、

ひよっとしたら新一の家に

コナン君がいるかな？と思つてね・・・」

蘭はその場だけ言い逃れをした。

「で、コナンは探偵ボウズの家に行ったのか？」

「うつん…いないわ・・・」本当は部屋で眠っているが
小五郎には教えなかった。

「ったく・・・あの生意気ガキはどこ行っただ？
蘭行くぞ・・・」

「う、うん・・・」

私は博士の家を見ながら

お父さんと家に帰ろうとした。

「おお…蘭君にそして毛利君じゃないか！！
久しぶりじゃのー」

ついでにワシの新作ゲームやって見るか？」

博士が庭で私とお父さんに
手をふっている。

「せっかくだからワシンちに上がって
くるのじゃー！」

大声で叫ぶ。

博士はどうしても私達を家に入れたい様子だ。

私達は遠慮なく博士んちに

入った。

16 私はあなたを裏切り者だと思っていた（後書き）

三輪野助「最近話がめちゃくちゃ変なんです。

なんでこんなワケのわからん話になるのだろうか？

ここからは難しいなあ……」

コナン「まったくだ。めちゃくちゃな話書いてやがるな……」

評価お願いします

m () () m

17 すべてを話す時がきた・・・

ここは博士の家―

博士んちに蘭と小五郎が訪れた。

お父さんは博士の新作ゲームを

やらされている。

「なんで名探偵毛利小五郎が

博士んちでゲームをやらなければならねえんだよ……」

ブツブツ文句を言っている。

私はキッチンで博士と会話。

会話は何気ないことを話している。

哀ちゃんは、地下室でパソコンを
うつている。

私が地下室のほうへ行くと

カタカタと音が響く。

彼女はずっと1人。

なかなか私の前には
現れない。

相変わらず1人。

彼女の心は両親がなくなったと聞いてから
変わった。

そして明美さんまで失ってしまった。

悲しい過去、薬を作った罪悪感に
しばられている。

それはすべて私のせい……

私がこんな組織を作ってしまったから・・・

私はうつむく。

「蘭君・・・どうしたんじゃ？顔色悪いんじゃが・・・」

「別になんでもないよ……
大丈夫だから・・・」

博士はとても私のことを

心配してくれる。

博士は優しいね

私がどれだけあなたたちを

困らせたりしていたか

知らないで……

私、哀ちゃんと話したい。

哀ちゃんの姿の志保ちゃんに

伝えたいことがある。

地下室に入ろう。

その部屋で彼女が

待っている。

目の前にあるドアが、

大きな壁のように

見えた。

ドアを開いた瞬間は、

悲しそうな哀ちゃんの表情が

私の瞳にうつる。

もう二度と見たくもないその表情を

きつと見ることになる。

このドアを開けなければ、

組織のことを一生

伝えられないまま・・・

そのまま時間だけが

過ぎていく・・・

そう時間はもう消えていく。

こうして迷っている間にも

地下室に入ることだってできるのに・・・

これ以上志保ちゃんに

つらい思いをさせたくない。

組織の数々のことを

話したりしたら彼女は

もっと傷ついてしまうだろう・・・

この話を聞いたら志保ちゃんは

どんな顔を

するだろう・・・

ごめんね
・・・

本当にごめん志保ちゃん・・・

真実言ってもいいかな？

トントン

思わず私はドアを叩いた。

「博士・・・何の用・・・？」

「あ・・・いや…。博士じゃなくて私なんだけど・・・」

「哀ちゃんいいかな・・・。」

「いいわ！入って・・・。」

私は部屋に入った。

哀ちゃんはパソコンをうつのを止め、

私のほうを向いてくれた。

「で、何が聞きたいのかしら？」

「あ、えつと新一って今何をしているか知っている？」

「哀ちゃんは驚いた表情だった。」

「私はとりあえず遠まわしに話を」

「持ってくるようにした。」

「新一の事情を話してくれれば、」

いつか組織についての話題に

なると思ったから・・・

しかし志保ちゃんは

そのことについては

なかなか教えてくれない・・・

その話題に触れたくないようだ。

私が何も新一の事情を

知らないからって・・・

そう、志保ちゃんは

私がコナン君の正体が新一だと

わかっていることが

知らないんだ・・・

「哀ちゃん・・・

本当は新一がいなくなったこと知っているでしょ？

トロピカルランドの帰りに

黒い服を着た人を新一は

気にしていたのよ・・・

あの人達のせいで新一は帰ってこないの？」

あの人達とはジンのこと。

本当はあの後どうなった

知っているが

知らないふりをした。

志保ちゃんはさらに

険しい顔になっていた。

「あなたは黒い服の人達のことを

知っているみたいね・・・」

「まあ、トロピカルランドで見たから・・・」

「ふーん・・・」

まあいいわ。工藤君について本当は知っているの・・・

あなたは工藤君のことをものすごく心配していたから、

何も言わなかったけど・・・

言ってもいいわね・・・」

志保ちゃんは心配そうに言った。

そして自分のせいで

新一が小さくなったことを

話すのことは、

とてもつらいだろう・・・

志保ちゃんは悲しそうな表情を

していた・・・

17 すべてを話す時がきた・・・（後書き）

三輪野助「また慌て

めちゃくちな話になってしまいました。
すみません・・・」

今日はコナンは休みです

評価お願いします

m ((m

18 灰原の思い（前書き）

キーワード増やしました

サブタイトルは最後のほう関係あると思います。

ワケのわからない話かもしれません。

すみません

18 灰原の思い

志保ちゃんは戸惑っている。

やっぱり私に気づかっているのかな？

「ねえ 新一のこと・・・本当は知っているんでしょ？」

さつき教えるって言ったじゃない・・・」

「でも、あなた工藤君の事情どうしても知りたいの？」

「うん・・・」

だって哀ちゃんが新一の様子を知っているのなら

隠さず教えてほしいと思ってるね。」

「そうね・・・教えるって言ったわね・・・」

わかったわ・・・」

あなたがどうしてもって言うなら教えてあげるわ・・・」

「うん・・・」

私は新一の事情は知っているのだが、

話を合わせて聞くことにした。

「工藤君のことを話す前に

組織のことを話したほうが、いいわね・・・」

「組織？」

「ええ…組織っていうのは

あんまり詳しくは知らないけど黒を好んでいるヤツらのことよ。

彼らにはあの方っていう存在がいて

その人が組織を作ったみたいよ。

ちなみにあの方っていう人は今だに

正体は謎・・・」

あのね・・・志保ちゃんいや、

（ここでは）哀ちゃん、

本当は私が組織を作った

あの方なの……

哀ちゃんは私の正体は

知らないみたいね

「ちなみに前までは私も組織の一員だったわ・・・。

コードネームは『シエリー』っていうの。

私は組織を逃げ出した。

組織からしてみれば私は裏切り者だとして

言われているわ。

私が組織を逃げ出した理由はあるわ。

一つは、組織がお姉ちゃんを殺したことよ…。

あなたも知っているでしょ？

広田雅美っていう人。

探偵事務所に依頼しに来たんだから？」

「うん・・・

雅美さんでしょ・・・

彼女は、自分の強盗の罪に耐えきれず自殺したみたいだけど・・・

実際はその組織が殺したの？」

「ええ・・・そうよ。

お姉ちゃんの本名は

宮野明美。

そして私の本名は

宮野志保

本当は十八歳

灰原哀の名前は偽名でありこの姿も本当の姿じゃないのよ…。」

「どういうこと？」

「私はある薬で幼児化したの。」

その薬の名称はA P T X 4 8 6 9。

組織が開発中の薬のことよ…。

もう一つあるわ…。

組織は『お姉ちゃんを殺した理由』を聞き出しても

全く答えてくれなかった。

私は組織に逆らって

A P T X 4 8 6 9の研究は

『お姉ちゃんを殺した理由を聞くまで中止する』

と宣言した。

そして組織に逆らった私は

研究所の個室に閉じ込められ、手錠をかけられたの……

その時、私は死ぬ覚悟を決めていた。

でも組織にだけは殺されたくなかった。

どーせ死ぬんなら、

自殺してほうがましだと思い、

A P T X 4 8 6 9 を投与した。」

「そして幼児化したということね。」

「ええ……死ぬつもりだったけど、

幸運にも腕は手錠から離れて

脱出することができた……

でも脱出したって私には

行く場所がない……

私は行き先に迷った。

その時にふと思い出したの。

A P T X 4 8 6 9 を投与した人の中で

死亡が未確認になっている人が

1 人だけいる記入されている資料のことを・・・

その1人とは工藤君のことよ…。

私は彼の存在を思い出したの・・・

工藤君もトロピカルランドの帰りに

組織に私が飲んだ薬と同じ物を飲まされた・・・

その薬で彼も幼児化してしまった。」

しかも幼児化したのは、

薬を作った私のせい・・・

本当は毒なんて作っているつもりは

なかった・・・。

組織の命令どおり開発した物が

毒だったなんて気づかなかった。

研究している時点で

薬に毒が含まれていることに

気づけば死者はでなかった。

工藤君は幸い命だけは無事だったけど、

勝手に幼児化させてしまった。

蘭さん……あなたの最も大切な彼を

薬で幼児化してしまった……

ごめんなさい……。

蘭さんには謝っても謝りきれない。

蘭さんは私が薬を作った

開発者だと知ったら

どう思うのだろうか……

18 灰原の思い（後書き）

三輪野助「すみません…

なんかよくわからない話になってしまいました。

コナンはまだ自分の家にいます（笑）」

評価お願いします

m () () m

19 あの方の立場

パソコン室。

私と哀ちゃんだけしかない。

今は、2人で組織の話題をしている。

私は哀ちゃんが組織にいたときの過去の悲劇や

新一のことを改めて聞いてわかった気がする。

その悲劇を味あわせた原因は、

冷酷な組織を作った私だ。

ごめんなさい…

哀ちゃん・・・

この世に組織なんて

なかったら哀ちゃんは

悲劇を味あわずにすんだのに・・・

どうして私は、組織なんて作ってしまったんだろう・・・

組織なんて作らなければよかった。

今さら後悔しても遅い……

「あ、あの……哀ちゃん……」

「何……?」

「一つ疑問に思ったけど、

『A P T X 4 8 6 9 っていう薬の開発を中断する』と宣言したってことは

哀ちゃんはその研究に貢献していたの?」

「ええ……薬を作ったのは私。

でもまさかA P T X 4 8 6 9 に毒が入っているなんて、

知らなかったわ……

私はただ

組織の命令で両親の研究のあとを継いだだけよ……。」

哀ちゃんの表情はとても暗かった。

私では、慰めることもできない。

哀ちゃんの両親にも

薬の研究を命令したのは

組織なの……………

組織の一員であるあの女は目的を果たすために、

哀ちゃんの両親に

薬の開発を進行させたの……

そう……あの女は哀ちゃんの両親を

殺した。

あの女のために哀ちゃんの両親は、

犠牲になってしまった。

哀ちゃんも両親の本当の真実を知らないまま……

両親のことを言ったらきっとショックを受けるだろう。

ねえ…… 哀ちゃん

今こうして、

一緒にしゃべっている私が

あなたの恐れている組織のあなたの方だとは

思いつかないよね……。

私もつらいよ…。

組織のみんなのために

あの方として

今まで新一や志保ちゃんを痛みつけていたから・・・

哀ちゃんは、何も悪くない。

全部………

全部……私のせい

私がこんな冷酷すぎる組織を

作ってしまったんだから。

気持ちがあふれている。

何か感情がでてしまう・・・

「ごめんなさい……。」

感情があふれてつい一言言っ

てしまった。

謝っても謝りきれない。

涙があふれてくる。

もうどうにもならない涙の大粒・・・

普段、人前では涙を

見せることがない蘭でも

灰原の前で涙を流した。

灰原は急に涙を流した蘭に驚いている。

「蘭さん……どうしたの？」

どうしてあなたは泣いているの？

なぜあなたは私に謝っているの？

私のほうが謝らないけないのに……」

哀ちゃんの表情はとても寂しそう。

哀ちゃんは自分のほうをせめている。

痛いよね。お互いに……

「哀ちゃん、今まで黙ってごめんなさい……」

あなた達をつらい目に遭わせていたのは

私なのよ…。

A P T X 4 8 6 9 のことも

明美さんのことも全て私のせいで…」

蘭の声は途切れた。

「蘭さん…何言っているのよ…。

別にお姉ちゃんが殺された事件に

蘭さんは関係ないわよ。

お姉ちゃんを殺したのは…。」

「^{ジン}gin…。」

えっ…

「哀ちゃんがいう組織の幹部のジンよ。
黒い服を好んでいるわ…。」

ジンは明美さんやピスコを

愛用の銃『ベレッタ』で

射殺した。

相棒のウォッカと共に行動しているわ。

ジンやウォッカは彼らのコードネームよ…。」

「ジンとウォッカは
組織の一員よ。

でも、なぜ蘭さんが

ジンとウォッカのことを

話してもいないのに

知っているの？」

灰原は何みかも見透かしているようだった。

蘭があの方だということも・・・

「それは、私が組織のあの方だから…。

私が組織を作った張本人なのよ…。」

蘭は一言つぶやいた。

19 あの方の立場（後書き）

三輪野助

「本当にすみません。」

こんな下手&ワケがわからない話で本当にすみません。

ちなみにコナンはまだ自分の家に居ます

そして小五郎は博士の新作ゲームをやらされています。

なぜ灰原を登場させたかというと蘭があの方だと知ってかなりショックを受けると思ったからです」

どうか評価お願いします

m () m

20 あの方は蘭さんだった・

“私は組織のあの方”

蘭さんは、そう言っていた。

さりげなく私の目の前で・・・

そのたった一言で

すべてのものが信じられなくなった。

お姉ちゃんが亡くなって

私は何もかも失った。

そんな絶望的な私を

救ってくれたのは蘭さんの存在だった。

彼女はお姉ちゃんに似ている。

蘭さんというとお姉ちゃんが

まだ生きているように見える。

お姉ちゃんが傍にいるような感じだった。

蘭さんはお姉ちゃんの代わり

お姉ちゃんのように

純白な心を持っていると思っていた。

しかしそれは、違っていた。

蘭さんは……

蘭さんは……“組織のあの方”

たった六文字のその言葉は

私は信じられなかった。

今自分はどうすればいいのか

わからない……。

声も出ない。

ただショックで硬直している。

これは現実だとは受け止められない……

いや……、受けとめたくない。

『運命から逃げるじゃねえよ……』

ねえ… 工藤君

私、蘭さんが組織のあの方だという現実から

逃げているのかしら…

この真実は

受けとめなければいけないの？

私は真実を受け止めることが怖いの？

そりゃ蘭さんがあの方だなんて、

信じたくない。

でも、真実を受けとめなければ

一歩も前には進めないまま…

蘭さんと私は

組織のあの方と裏切り者の関係だった。

そんな2人が今こうして

話することができるのは

運命かしら…。

そして蘭さんがあの方だという事実を

告白することも

最初から決まっていたんだ。

私が普通の生活で過ごした時から、

蘭さんはあの方だった。

その時からすでに私たちの運命は、

決まっていた・・・

蘭さんは泣いている。

なぜあなたが泣いているの？

私のほうが泣きたいわよ・・・

蘭さん…教えて

どうしてあなたはあの方なの？

どうしてお姉ちゃんを殺す人がいる組織なんて

作ったの・・・？

「どうして・・・」

途切れた声。

それは灰原の声だ。

「どうして・・・

蘭さんは組織を作ったの？

組織なんてなければ、お姉ちゃんは

ジンに殺されなかったのよ…。

私だって・・・

こんな薬の研究を受け継がなくても

良かったのに・・・」

今の哀ちゃんは

私が知っているいつもの哀ちゃんじゃなかった。

あまりの悲しさに

冷静じゃなくなっていた。

これは哀ちゃんの本音だろう・・・

ごめんね… 哀ちゃんいや、志保ちゃん

今までつらい思いばかりさせてしまって・・・

長い間つらかったんだよね。

でも私が組織のあの方になったのは、

あの人が私を求めて

いたから・・・

私があの方になった理由

それは・・・

20 あの方は蘭さんだった・・・（後書き）

三輪野助「またまたわかりにくい話になってしまいました。
さて、蘭があの方になった理由

実は私七割／＼八割程度しか考えてなくて↑オイオイ…

肝心なところがしっくりこないのです。

まだ次回には詳しくは書きません。

いつかは絶対に書きます↑オイオイ

こんなバカ作者ですみません

まだコナン＆小五郎は出てきません。」

評価お願いします

m () m

21 蘭があの方である理由

――十年前――

蘭がまだ小学二年生だった時のこと。

新一の家に着いた。

「じゃあな…蘭」

新一は手をふつてくれた。

「新一、じゃあね。」

私も笑顔で手をふった。

ここから家までは、

一人ぼっちだった。

風はとっても強くて

冷たい……

何かが起こる前ぶれかのように……

ポトンと軽く何かが落ちてきた気がする。

何だろ……と思った。

私は拾ってみた。

吸ったあとのタバコだった。

そのタバコはとても黒かった。

私の背後に誰がいるような気がした。

「だ、誰・・・？」

「私？私はね…クリス・ヴィンヤード」

クリス・ヴィンヤード

それはアメリカの大女優

そんなことは、こんな幼なかった私でも

知っていた。

なぜ、大女優が私の目の前にいるのか

わからなかった。

「ごめんなさいね…」

そのタバコ私が、捨てたのよ。

拾ってくれてありがとう。」

「なんでタバコを捨てたの？」

「理由はないわ・・・」

単なる己に対する苛立ちかしら・・・

自分の犯したことにイラついているのよ。」

「どうして・・・イラついているの？」

「私はね、人を殺すという最も卑劣な行為を

犯してしまったの・・・」

もちろん殺すつもりはなかったわ・・・

でも私は人を殺したという罪悪感に押しつぶされているのよ。

あれはずいぶん昔のことよ。

あの時の少女には悪いことを

してしまったわ。」

「あの時の少女って・・・」

「名前は確かジョディ・サンミリオンだったわ・・・

しかし少女の顔は覚えていないのよ。

私はその子の父親を殺してしまった。

私の自分勝手な行為のせいで・・・」

クリスはうつむいた。

蘭からタバコをとって、

自分のタバコケースに入れた。

「大丈夫・・・？」

「ええ…　大丈夫だわ。」

私はかつては凶悪犯グループの一員だったの。

その中にも罪に耐えきれず自殺した人はいたわ・・・

凶悪犯のグループの生き残りは

ジンとウォツカそして、私よ・・・

少女の父親はFBIの捜査官として

私たちのことを調べていたの。

彼は私たちについての調査資料を

保管していたわ。

このままでは私たちの悪事を
ばらされてしまうかもしれない。

私はそれが怖かった・・・

自分たちを保ちたかったから

だから私は私の存在を知っている

彼女の父親を殺したの・・・

罪に罪を重ねてしまった。

どうにも罪は薄くならないわ・・・

どうしても私は自分の罪から逃げれないわ・・・

ねえ…私を助けて・・・

そして、私たちを悪夢から救って・・・

もう………

これ以上たえきれないの」

クリスは涙を流した。

その様子は私を頼っているようだ。

彼女がなぜ私を頼るのかは

わからないけど

とにかく私を真剣に見ていた。

「クリスさん・・・」

私にはあなたを助けるなんてこと

できないよ・・・

私は何の役にも立たないよ。」

「いいえ… 私たちを救うことができるのは、

毛利蘭さんあなたしかいないのよ。

私たちもうあなたの優しさがないと

限界なの・・・」

途切れ途切れに聞こえてくるクリスの声。

私の目の前にいるクリスは、

女優としてのクリス・ヴィンヤードとは

別の表情だった。

「でも私は、あなたのために何をすればいいの?」

「私たちを匿ってほしいの。」

私たちの存在を世間に知られるのがとても怖いから・・・

お願い……私たちにはあなたの優しさが必要なの。」

クリスは蘭の小さな肩に手をのせた。

ブルブルと震えているのが、伝わってくる。

クリスさんは犯罪を犯しまっただけど、

きつと何かあるんだ。

心の奥にはいろんな思いが、

秘められているんだ。

表情を見ればわかる。

クリスさんの心境や今のこの状況だってわかる。

私がいくら幼くても

クリスさんの気持ちは良くわかった。

「お願い…Angel」

この彼女の必死な声に

私は痛感した。

「私は、あなたたちを救ってあげる。

いつか私があなたたちに光を与えるわ。

それまでずっと私があなたたちを見守るからね。」

「ごめんなさい…

こんな闇の包まれているだけの私のことを

助けてくれるなんて・・・」

「ううん……。誰だって最初は光のような心を持っているのよ。

それが人の感情によって

殺意などがめばえて闇のような心を

持ってしまうだけのことよ。

あなたたちだって光を取り戻すことはできるわ。」

「ありがとう……。Angel」

微妙に涙を流している。

蘭はさりげなくハンカチを渡した。

「ありがとう。」

それだけつぶやいて
ハンカチで涙をふく。

クリスは蘭の優しさに耐えきれず、

大量の涙を流した。

この時のベルモットは、私に本音を話してくれた。

今のような秘密主義のベルモットでは

なかった。

凶悪犯の間では、

酒のコードネームで呼び合っている。

クリスのコードネームは、

ヴァムース

そして日本かというと

『ベルモット』というコードネームである。

あとベルモットの仲間の

ジンとウォッカも私たちと

一緒に行動している。

最初の内は蘭の影響で彼らも明るかった。

彼らも犯罪など

決して犯さなかった。

しかし月日が経つにつれ

いろんな犯罪者が私の周りに集まってきた。

それはコードネーム

キャンティ、コルンと呼ばれた人たちのこと

そしてピスコも私の前に現れた。

それから、彼らは犯罪を多く犯すようになった。

そして多くの人々が集まりやがて組織と
呼ばれるようになった。

ベルモットだって蘭の言った言葉を忘れて

次から次へと人を殺していく。

ジンやウォッカ、

そしてピスコ、キャンティ、コロンも

私でも止めることの

できないぐらい犯罪を犯していく。

しだいには、超最強な組織になってしまった。

私はそんな彼らの姿を影から見ていただけだった。

私はこの組織のあの方になった。

そしてずっと光を忘れ

輝きを失ってしまった彼らを見守っていた。

21 蘭があの方である理由（後書き）

三輪野助「蘭が組織に入った理由本当にしょうもなくてすみません。しかもわかりにくくてすみません。」

なぜベルモットが蘭に助けを求めのかそこですけど私はまだ考えていません。

ダメ&バカ作者ですみません」

評価お願いします

m (_ _) m

22 両親の真実（前書き）

今回は灰原の両親についてです。

22 両親の真実

私は聞いた…。

蘭さんがあの方である理由

ベルモットたちのために

光を与えようとしていた。

彼女の心はやっぱり真っ白だ。

人を救うことを自分のことのように

思っているのだから・・・

たとえあの方になっただって

蘭さんは蘭さんのままだった。

蘭さんの純白な心だけは、

失っていなかった。

私は少しほっとした。

しかし組織の目的と両親の真相

そしてお姉ちゃんを殺した理由は

疑問に思った。

「蘭さん・・・」

「何・・・？」

「お父さんとお母さんはどうして組織に入ったの？」

私の両親はどんな研究でなくなったの？

蘭さんは一体何を目的にしていたの？

教えて……………。

ねえ……………蘭さん

教えてほしいわ。」

「じゃあ最初に両親の真実を教えるわ。」

哀ちゃんの両親が研究中の事故で
なくなったこと。

私があの方になってから

事件は一年後に起こった。

――回想――

これは私が小3の時に起きた事件である。

コツコツとブーツの音がする。

それはある女が優雅に歩いていた。

その女は研究室に入っていた。

その女は研究室に入ってクスツと笑った。

「誰だ・・・？お前は？」

「あら・・・ 私のことを知らないの？」

私は組織の一員なのよ。」

「いや・・・ お前みたいなヤツ組織にはいない。お前は誰なんだ？」

「私の紹介などどうでもいいのよ。」

それより宮野厚司あなたに

頼みがあるからここに来たのよ。

死者を蘇らせる薬を

作ってくれない？」

「……」

「ち、ちよつと待って……」

死者を蘇らせる薬なんて
まだ誰も作っていないのよ。

いや…… 完成する可能性が非常に低い。

そこまでの科学は、
今現在はまだ発達していないわ。

それだけじゃない。
在はまだ発達していない。

それだけじゃない。
その薬の開発はものすごく危険

それは命を失ってしまうぐらい……

死者を蘇らせる秘薬を作るのに挑戦した人々は、

全員失敗で終わり滅びていった。

そんな危険な薬作れないし、

完成だつてできないわ。」

「何を言うかと思えば、エレーナの言い分か・・・

私が何のために組織に入ったのだと思う？

その秘薬を手に入れるためよ。」

「その秘薬をどうするつもり？」

「私の失った人を蘇らせるためよ...」。

私の目的言ったから、早く死者を蘇らせる薬を作つて・・・」

その女はイラついていた。

その時は冷静さが欠けていた。

「薬を作ることなら断るよ...」。

「どうして・・・」

「死者を蘇らせるなんて

そのあなたの大切な人を

失った悲しみから逃げているだけじゃないか。

命あるものはいずれは全て死ぬ。たとえ大切な人を失ったつてそれを受け入れなければならぬ！

悪いがその理由では薬の開発は

行わないよ。」

女はイラついているのを隠せなかった。

自分が持っているハンカチを取り出し、

背後から宮野厚司を

クロロホルム付きのハンカチで

口をおさえて眠らせた。

「な・・・あなた」

エレーナもクロロホルムをかかされ、

すぐに眠らされた。

2人とも眠ってしまった。

「お2人とも今までご苦労さん！！」

あなたたちのあとは組織を殺すから・・・

組織は有能なあなたたちを研究に必要なという理由で派遣したのよ。

そのため組織はあなたたちの娘をだまし続けたのよ。

『彼女たちが物心がつく前に

両親は死んだ。』って・・・

ウソをついていたのよ。」

女は2人をロープで縛りながら

独り言をつぶやいた。

そう、あの人が凶悪犯だった時に、

彼女たちの両親はすでに研究につかわれていた。

私もこれから彼ら2人を殺そうとしているのかもしれない。

でも、私の行為はあの人よりは

まだましだよね…

あの人は何人もの人々を殺している。

私は、どうしても

大切な人を蘇らせたい。

そのために死者を蘇らせる薬を作ることを頼むのは、

彼らには迷惑なことかもしれない。

でも蘇らせた！

たとえどんな手段を使っても・・・

彼ら2人には薬の開発を進行させなければならない。

だから私は彼らをロープで縛ったまま研究室に閉じ込めた。

そして毎日研究室に入っては、

薬を作ることを頼んでいた。

彼も最初の内は薬を作る気はなかった。

だから私は薬を作るまで彼らを拘束するという手段をとった。

時間が経っていくにつれ

命の危険を感じた宮野厚司は

薬の開発に同意した。

しかしその研究はかなり難しい。

宮野厚司は薬があと一步で完成するっていつときに

なくなった・・・

それは爆発による衝撃からである。

その近くで彼を見守っていたエレーナも

一緒に爆発に巻き込まれて、

そしてなくなった。

研究室はめちゃくちゃになっていた。

その研究所自体跡形もなく滅びていた。

しかもそこにはもう何もない。

あの方である蘭も研究所へ行った。

彼らが使っていた研究室に残っていたのは、

完成してあった死者を蘇らせる薬だった。

蘭はそれを拾ってずっと

持っていた。

そして今も保管してある。

哀ちゃんの両親は、物心がつく前は

まだ生きていた。

しかし凶悪犯の仲間のあの人が

何年も彼らを研究に使っていた。

哀ちゃんの両親の真実は

あの女によって研究中に滅びたのだった。

――回想終了――

「なら私が小学生の低学年の時はお父さんとお母さんは生きていたの？」

「ええ… 生きていたわ。」

しかしその時はあなたはイギリスに留学に行って

いたから両親に会わせることが

できなかったわ。

あと私の目的は記憶喪失の薬を

作ることなのよ。」

「記憶喪失の薬？」

「ええ… 記憶喪失の薬さえあればいいの…」

ピスコのために…」

「ピスコのためってどういうことなの？」

「ピスコはね、博士と年の離れた兄弟なの…」

そして私と博士、ピスコは幼い頃

一緒に遊んだことがあるの。

ピスコは実をいうと大切な仲間なんだ！

でも彼は犯罪を犯し、

組織に入った。

彼がなぜ犯罪を犯したかはわからないけどね…。

それからのピスコは殺人鬼になっていた。

私にも止めれないぐらいに…

人々を殺していった。

私はジンに命令して

止めることのできないピスコを殺す手段をとった。

ピスコの死体はアジトの中

腐らないように保管してあるわ。

私は死者を蘇らせる秘薬は持っていたわ。

ピスコに死者復活の秘薬を

投与することはできるわ。

それでピスコは復活するけど、

それじゃあ彼の心は殺人鬼の時と同じ

彼を殺した意味はないわ。

だから私は殺人鬼の頃の記憶を失わせる

『記憶喪失の秘薬』を求めているの。

ごめんなさいね…哀ちゃん

いや、志保ちゃん……

これであなたに私のことは全て話したつもりよ。

あなたに言い残すことはもう何もないわ…。」

志保ちゃんの様子は不安そうだった。

「蘭さん・・・どういふこと？」

「あなたに

最後一言言っておくわ。

さようなら・・・」

蘭は涙を流した。

もう志保ちゃんとうして会話できないと思ったからだ。

蘭はパソコン室から出ることを決意した。

22 両親の真実（後書き）

三輪野助「いい加減な文章ですみません。

あの人とあの女は別人です。

まだ誰かは言っていないませんが、いつれはいいます。

今回もまたわかりにくい話&文章ですみません。」

評価お願いします

m (((m

23 蘭さんは私の前から消えていく

蘭さんがどこか遠くへ

行ってしまうような気がする。

私の知らない世界へ行ってしまう。

蘭さんとは二度と会えない気がする。

もうこれっきり私の前には現れない気がする。

それがとっても怖い・・・

さようなら... だなんて、

もう会えないような口調じゃないの。

寂しいよ・・・

つらいんだよ・・・

組織のあの方であつたつて

蘭さんは蘭さんのままだよ・・・

別の人ではない。

蘭さん... 行かないで・・・

遠くへ行かないで・・・

灰原の気持ちは揺れ動いている。

一瞬だけ灰原の脳裏には

明美さんと重なった蘭がうつっていた。

「行かないで・・・

蘭さん、あなたが遠くへ行ってしまういそいで怖いんだよ・・・」

灰原は必死に蘭を引き止める。

「哀ちゃん・・・私はもう新一と戦わなければいけないの・・・

彼とは、敵同士なんだから・・・

私は戦うためにここを去るのよ。

その前にあなたに真実を伝えたかったの・・・」

蘭さん・・・それだけなの・・・

あなたはパソコン室から

去っていくの？

あなたの存在が私を大きく変えたのよ。

お姉ちゃんのような光を持っているあなたがいたから

私は生きのびることができたのよ。

蘭さんのおかげで真っ黒な私にも

少しだけ白が入ったよ。

そんな蘭さんの存在は必要なの。

私じゃなくても

工藤君だって

あとのそのほかの人々も

きっと蘭さんの存在は

必要なんだよ。

「蘭さん・・・やっぱり行かないで

あなたの存在は人々にとって大切なんだよ。

ねえ…お願い」

哀ちゃんは泣き崩れた。

たくさんの涙を流し、

私だけを見ている。

とっても切ない。

でも…私だって

私だって、

新一や志保ちゃんたちと

このまま普通に何事もなく

過ごしていきたいのよ。

それは私があの方であるから、

無理なの・・・

私は今までの平和な生活は好きなんだよ。

志保ちゃん……

それだけはわかってほしいの・・・

「志保ちゃん…

やっぱりごめんなさい・・・

私は、志保ちゃんが思っているほどいい人じゃないのよ。

あなたのお姉さんの明美さんとは違うわ。

彼女のような純白の心じゃないわ。

時には憎しみっていう感情もあつた・・・

自分なりに光を追い求めていたけど、

結局は見つからなかった。

今じゃ罪人と同じよ。」

「でも・・・私は、」

「志保ちゃん…」

今こうして別れるのは運命なのよ。

そして私と志保ちゃんが

組織のあの方と構成員っていう関係なのも

運命……。

運命には逆らつてはいけないのよ。

でもこれは永遠の別れではないの。

またいつか違う場所で会える可能性はあるよ。

それが今ではないけど……

私達が会えるって信じていればきっと

今までと同じように過ごしていけるよ。」

蘭さんが工藤君と戦う。

大切な仲間を次から次へと失ってしまう。

そんな気がして怖い・・・

でもそれは私達には

最初から決められていた

運命……。

工藤君の言葉どおり今の状況からは

逃げられない。

大切な仲間を失っていくかもしれない。

でも彼らの無事を信じてあげることが

私にだってできるよね……。

「最後に志保ちゃんにこれをあげるわ。」

蘭が丸めてある何かを灰原に渡した。

何だろうと思い灰原は

開けてみた。

それは天使の絵だった。

「これ、天使の絵なんだけど……美術の時間に書いたんだ。
志保ちゃんこの絵でいいかな？」

その天使の絵はとても輝いていた。

光をたくさん浴びている。

そう……蘭さんのように……

光輝く美しい天使。

「こんなに美しい絵

私にはもったいないわ。

蘭さんが持っていていいよ……」

蘭さんは首を横にふった。

「ううん… その天使の絵は志保ちゃんが持っていていいよ。

私は今まで志保ちゃんにつらい思いばかりさせていたのだから

謝るついでにあげるわ。

それに私には天使は似合っていないわよ。

その天使の絵を見て私のこと思いだしてくれたら嬉しいわ。

では、いつか会う日がきたら

その時はまた一緒に

遊んだりしゃべったりしようね！」

蘭さんは笑顔でドアを開けた。

本当は無理して涙がでるのをこらえているくせに・・

さよなら…蘭さん

でも永遠の別れなんかじゃないって信じているよ…。

蘭さんはゆっくりとドアを閉め

地下室から去った。

23 蘭さんは私の前から消えていく（後書き）

三輪野助「すみません。ものすごく下手&話が強引で本当に申し訳ないです。

コナンはきっと次の話に出てくると思います。

天使の絵のネタって誰かが使っていた気がするのですが・・・
もし使っていたらすみません

パクリではないので・・・」

評価お願いします

m ((m

24 再会

暖かい光が入ってくる。

なんだ・・・ここはどこだ！

ん...ここは

オレの部屋.....

なんでオレがここにいるんだ。

コナンは自分の状況（蘭に麻醉銃を撃たれたこと）を思い出している。

はっ... そうか。

オレはあれから眠っちまったなあ.....

それで蘭はどこだ！

まさか、

灰原に自分があの方であることを伝えるために

博士んちに言ったのか・・・？

オレは今蘭がどうしているのか気になった。

すぐに家を出た。

外の世界は、とても
明るい。

さまざまな光が、オレの周りに

集まってくるみたいだ。

とても日照りが良い。

心地よい光に包まれている気分だ。

今日の太陽は暖かい。

コナンは暖かい光や風の中、

隣りの博士の家へ向かった。

――――

私は、パソコン室から出ていった。

階段をあがってキッチンへ行った。

そこには博士の新作ゲームをやり終えた小五郎がいた。

「オイ…… 蘭お前今までどこにいたんだ？」

「地下室のパソコンがある部屋よ。」

「そうか。もう昼間だし帰るか！」

オレも博士の新作ゲームをやらされて疲れているからなあ…

眠たいんだよ。

蘭、帰るか・・・」

お父さんは少し寂しそうな表情だった。

お父さんはコナン君のこと

本当に心配しているんだなあ…

コナン君、いや新一

私あんたを裏切ってしまったわね…

新一は二度と私の前に現れない。

そりゃあ……

そうだよね・・・

新一を裏切ってしまったんだから・・・

でも一番大切な人まで失ってしまったたら、

もう私には何も無い・・・

私は覚悟して志保ちゃんの前から

消えた。

志保ちゃんと別れる時、

私だってつらかった。

けどこれも運命だと

思っ
て歯を食いしばり、

志保ちゃんの前から去った。

新一に次会うのは、おそらく

私達が戦う時。

それは私達の最終決戦

私は悲しかった。

覚悟も決めていた。

博士の家から出た。

昼になってとても日差しが良い。

組織と違って暖かい。

光はまぶしい。

空は晴れ晴れとしている。

とても青い。

雲も曇ってなく蘭のように純白である。

快適な世界

博士の家の前には、

悲しいような陰しそうな表情をしている

コナンがいる。

コナンは蘭を待っている様子だった。

私は少し不安だった。

私は彼に何を言われるのか

怖かった・・・

それは私が今まで新一に

つらい思いをたくさんさせた上に

あなたを裏切って

しまったから・・・

「久しぶり・・・

蘭ねえちゃん!!」

えっ………。

私は驚いた。

コナン君は私に笑顔で

『久しぶり』って言ったから……

今までの私が新一につらい思いをさせたことも

なかったかのように・・・

「何が『久しぶり』だよ。

まったく……今までどこほつつき歩いていたんだよ……。

蘭が心配していたぞ!」

「小五郎おじさん、ごめんなさい・・・

蘭ねえちゃんもごめんなさい・・・」

いつも子供ばいコナン君の声

久しぶりに聞いた。

「ううん… いいよ。」

こうしてコナン君が、戻ってきたのだから・・・

それだけで嬉しいよ。」

「じゃ帰るか!!!」

「あ、ちよつとお父さん待ってよ…。」

私とコナン君はお父さんを追いかけながら、

家へと向かっている。

家に着いたらいつもどおり

コナン君も探偵事務所ですぐに居候生活

お父さんは、

『またコナンは居候か?』なんて言っている。

まったく、素直じゃないんだから・・・

本当はコナン君のこと

すごく心配ですごく大切なくせに……

私にはお父さんの気持ちわかるよ。

良かった。

またコナン君に会うことができたのだから……

志保ちゃんとだって

会うことを信じていればきっとまた会えるよ……。

しばらくはいつもと同じ生活になりそうだ。

お互いに今までの過去は

心の中に残ったままだけど……

そして私達いつかは戦うことになる……

でも私達必ず最後は幸せになる。

私は空に誓った。

24 再会（後書き）

三輪野助「これで最終回です。なんだこの終わり方と思われると思います

この後に続編『世界止めてpart-2』を書きます。
今度こそ今までの謎を全て明らかにしたいです。

このような私の駄文を読んでくださった方々ありがとうございました。

「

評価お願いします

m (_ _) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n09111b/>

ここから始まった

2010年10月10日14時00分発行